

第二十九課 待賢門の戦

陣の大將は誰人ぞ、名のられ候へ」と宣へば、「この手の大將は清和天皇九代の後胤、左馬頭源朝臣義朝」と名のつて、「悪源太は二度まで敵を追ひ出すぞかし。進めや、若者」と宣へば、中宮大夫進右兵衛佐新宮十郎、平賀四郎、佐渡式部大輔重成を始めとして、われもくと驅けられり。右兵衛佐頼朝は生年十三と名のつて、敵二騎射て落し、一騎に手負はせて、殊に進みて驅けられけり。左馬頭宣ひけるは、何と云へども若者共の軍するは疎に見ゆるぞ。義朝驅けて見せんとて、眞前に進まれければ、一人當千の兵共、打ち圍みてぞ戦ひける。頼盛暫く支へけるが、門より外へ追ひ出さる。義朝續いて攻め戦へば、大宮表へ引きにけり。平家馬の息を繼がせて驅け入りければ、源氏大内へ引き籠る。源氏又馬の足を休めて驅け出づれば、平家又大宮表へ引き退く。平家は赤旗赤符、日に映じて輝きけり。源氏は大旗、腰小旗、皆押し並べて白かりけるが、風に吹き亂され勇み進める有様は、誠にすさまじくこそ覺えけれ。源平の兵共互に命を惜しまねば、眼前に撃たるれども顧みず、主の先に進まんと、こゝを前途と戦うたり。悪源太、左衛門佐をば撃ち洩らし、鎌田に向つて宣ひけるは、都芳門の軍は如何あらん、いざや頭殿の御前仕らんとて、打ち具して馳せ來り、又眞前にぞ進まれける。こゝに鎌田が下人、八町次郎とて、大力の剛の者早走の手利あり。馬にてこそ具すべけれども、なか／＼徒立好かるべし、高名せよと云ひければ、一年も腹巻に小具足差し堅めて、眞前に進みたりけるが、敵の馬武者の遙に先立ちて落ちけるを、八町が内にて追ひ詰めて首

を取りたりければ、それよりして八町次郎とぞ云ひける。されば又この者三河守の聞ゆる早馳の名馬に、兩鐙を合はせて驅けられけるに、少しも劣らず追つ付きて、冑の頂邊に熊手を打ち懸けん、打ち懸けん、續いて走りければ、頼盛も冑を打ち傾け打ち傾け、あひしらはれければ、五六度は懸け脱しけるが、終に頂邊に打ち懸けてえいやと引けば、三河守既に引き落されぬべう見えられけるが、帶いたる太刀を引き抜いてしと、切る。熊手の柄を手本二尺ばかり置きて、つんと切つて落されければ、八町次郎、のけに倒れて轉びけり。京童これを見て、あはれ太刀や、あ切れたり、三河殿も能く切つたり、八町次郎も能く懸けたりとぞ感じける。頼盛は冑に熊手を切り懸けながら、取りも捨てず見も返らず、三條を東へ高倉を下に、五條を東へ、六波羅までからめかして、落ちられけるは、なか／＼優にぞ見えたりける。名譽の拔丸なれば、能く切れけるは理なり。この太刀を拔丸と云ふ故は、故刑部卿忠盛、池殿に晝寢しておはしけるに、池より大蛇上りて忠盛を呑まんとす。この太刀、枕の上に立てたりけるが、自らするりと抜けて蛇に懸りければ、蛇恐れて池に沈む。太刀も鞘に返りしかば、蛇又出で、呑まんとす。太刀又抜けて大蛇を追ひて池の汀に立ちてけり。忠盛これを見給ひてこそ拔丸とは附けられけれ。當腹の愛子に依つて、頼盛これを相傳し給ふ故に、清盛と不快なりけるとぞ聞えし。伯耆國、大原眞守が作と云々。三河守を落さんと防ぎ戦ふ待には大賂物、小賂物、藤左衛門尉助綱、兵藤内が子、藤内太郎家繼を始めとして、われもくと戦ひけ

り。兵藤内家俊は、元より大臆病の覺取りたる者なりけるが、大勢の中に蹴立てられて、心ならず馳せ行きけるが、馬を射させて幸とや思ひけん、小屋の内へ逃げ入りぬ。その子、家繼は父には似ず大剛の者にて、散々に戦ひ、敵數多撃ち取つて引きけるが、父が馬は射られて伏しぬ。主はなし生捕られにけりと無念なれば、家繼、生きて何かせんとて、只一人取つて返し、多くの敵を斬り伏せて、或る兵と引き組んで落ち、刺し違へて死しけるを、小屋の内にて見居たれば、心憂く悲しく走り出でんと思へども、戰場なれば怖しくて、子の撃たるを見續がざりけり。後日に六波羅へ参りけるを見て、惡まぬ者ぞなかりける。平家は勅詔に任せて皆六波羅へ引き返す。源氏は謀とも知らざりけるにや、内裏をば打ち捨て、追ひ懸け追ひ懸け戦ふ。その間に官軍を入れ替へて門々を固め防ぎければ、源氏内裏へは入り得ずして、そとに六波羅までぞ寄せられける。齋藤別當と後藤兵衛とは、多くの敵を追ひ返して、東三條に控へたるに、武者二騎馳せ來れり。實盛先づ一騎の武者に驅け合はせ、我君は誰ぞと問へば、「安藝國の住人、東條五郎」と名のる所を、能つ引いて射落し、その首を取りて、これは如何に後藤殿と云へば、實基も一騎の武者に馳せ向ひ、御邊は誰ぞと問へば、「讃岐國の住人、大木戸八郎」と名のりも果てねば、しや首の骨射て落し、その首取つて、「これ見給へ齋藤殿頭殿の見参にや入る、捨てやする」と、云ひければ、今朝より乗り疲らしたる馬に、生首附けて何かせん、いざ捨てんと云ひけるが、二條堀河まで馳せ來り、材木の上に二つ

の首を差し置きて、軍見ける在地の者共に預けて、この首失ふべからずと云ひ合めて驅け出づれば失うては悪しかりなんとて、日暮まで振ひ守りけるなり。右衛門督信頼は、今朝待賢門を破られて後は、軍の事は思ひも寄らず、隙を求めて落ちんくとぞせられける。義朝驅け出で、後は、大内にも忍びずして、御方の勢の跡に附きて怖づ河原まで出でられけるが、六波羅は寄せずして、河原を上には落ちられけり。金王丸これを見て、「右衛門督殿こそ落ちさせ給へ、追ひ懸けまゐらせん」と申せば、義朝「只首け、あれ體の不覺人なればなかなか軍がせられぬぞ」とて、河原を下にぞ寄せられける。

重盛の出立、義平の武者振、何と云ふ花やかさでせう。讀本の文は程度の調節をはかつて、餘程縮約されてゐますが、併し原文の趣は遺憾なく發揮されてゐます。

文は四段に分れ、第一段は戦の序幕で兩軍の勢揃へ、第二段は重盛の挑戦と義平の應戦、第三段は重盛と義平の一騎打、第四段は義平の奮戦と其の武者振となつてゐます。

「左衛門佐重盛、討手の大將を承つて言ふやう、云々」

此の段は兩軍の勢揃へです。

頃は平治元年十二月二十七日、辰の刻（午前八時）ばかりのこと、昨日の雪も消え残つて、内裏

第二十九課 待賢門の戦

の夜はさながら玉を敷いたやうに美しく、武士たちの鎧の金具がきら／＼と朝日に輝きわたつて、如何にも美しく見えました。

信頼初め、源義朝以下、平家の軍勢おしよせなば、一もみにもみつぶしてくれようと待構へてゐました。

寄手の大将左衛門の佐重盛は、生年二十三、赤地の錦の直衣に楯匂ひの鎧、龍頭の冑の緒をしめ、小鳥と云ふ太刀をはき、切文の矢負ひ重藤の弓を持つて、黄月毛の馬に、柳櫻を織り交ぜた鞍を置いてゆつたりと乗り、三千餘騎を引連れて堂々と乗込んで來ました。

「重盛は、手兵五百騎を率ゐて、信頼が守れる待賢門に向ひ、大吾聲に呼ばはりけるは、云々」

此の段は重盛の挑戦と義平の應戦です。

重盛味方の軍に打向ひ、

「年號は平治、都は平安、我等は平氏、味方の勝利疑ひないぞ」と味方の軍を勵まして、三千の軍を三手に分け、陽明、待賢、郁芳の三つの門へ押寄せました。

紫宸殿の大庭を初め、御所の大庭には源氏の軍勢がひし／＼と居並び、白旗三十餘流打立て、吹く朝風にヒラ／＼と繚り、門の外には平家の赤旗三十餘流朝日に照りはえて、燃え立つ様な美しさ。勇み立つた平家の軍勢三千餘騎、一度にとつと鬨の聲をあげれば、大内裏もゆるが／＼許りの物凄さです。

今までいかめしく控へてゐた信頼、急に顔色青ざめて草葉の如く、膝ふるわせて階段を降りかねてゐる見苦しき、家來達に助けられて馬に乗らうとしたが、何しろ信頼は丸く太つた大男です。其上初めて着けた大鎧、身體一つさへ始末のつかぬのを馬の上にかつぎ上げようとするのだから大變です。

主人の臆病にも似ず、馬ははやりきつたる逸物です。家來達が七八人、しつかと轡を取つてゐますが、放したら天へも飛びさうな勢です。

「さあ、さあ早く召し給へ。」

と、大の男を押上げたはずに、力が少し過ぎたと見えて、弓手の方へ乗越して、どうとばかりに轉げ落ちました。

急いで引越して見れば、顔は一杯砂まみれ、鼻血がだら／＼と流れ出て、泣くに泣かれん可笑さです。

第二十九課 待賢門の戦

第二十九課 待賢門の戦

やう／＼鼻血押し拭うて馬に跨り、待賢門へ出掛けたが、とても役には立ちません。
左衛門佐重盛、五百餘騎を引連れて押し寄せ、

「此の門の大將軍は信頼卿と見受けたり、斯く申すは桓武天皇の後裔、大宰大貳清盛が嫡男、左衛門佐重盛、生年二十三歳なり。」

と名のり掛けたから堪りません。

信頼は返事も得せておろ／＼聲、「それ防げ侍共ッ。」
と自分はもう逃腰です。大將に習つた侍共、我れも我れもと逃出すので、防ぐ兵士は一人もありません。

勝に乗つたる重盛は、勇みに勇んで大庭の椋の木の下まで攻寄せました。義朝之を見て、怒りの聲物凄く、

「悪源太は居らぬか！ 信頼と云ふ大臆病人が待賢門を破られたるぞ。あの敵早く追ひ出！」

「承知仕る！」

と駈け出でたる悪源太義平、練色の魚綾の直衣に、胸板に龍を八つほりつけたる八龍の鎧を着け、鹿の角の前立打つた高角の冑の緒をしめ、石切の太刀をひつさげ、重藤の弓を小脇にかいこんで、逸り切つたる鹿毛の駒に打乗つて駈け出でました。

つゞく兵には、鎌田兵衛、後藤兵衛、佐々木源三、波多次郎、三浦荒次郎、須藤刑部、齋藤別當、岡部六彌太、猪俣小平太、熊谷次郎、平山武者所、金子十郎、足立右馬允、上總介八郎、關次郎、片桐小八郎太夫、以上合せて十七騎、一粒選の荒武者です。

「悪源太義平、大音聲を上げて、云々」

此の段は重盛と義平の一騎打で、錦繪のやうな場面です。

「寄手の大將軍は誰人ぞ、名のれ、聞かん、かく申すは清和天皇九代の後胤、左馬頭義朝が嫡子、鎌倉の悪源太義平なり、生年十五歳の初陣より未だ一度も不覺の名をとらず、年積つて十九歳、見参せん！」

と呼びかけながら、五百騎の真中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追ひ廻し、豎横十文字に蹴散らし、踏み散らして荒れ廻ります。

「名もなき荒武者に目をかけるな、楯の匂の鎧に蝶の裾金物打つて、黄月毛の馬に乗つたるが大將軍重盛なるぞ、それ逃すな、重盛を生捕にせよ。」

義平初め十七騎、重盛一人を目がけて、

「組めや、組めや！」
と追っかけます。

大將軍を討たれては堪りません。組ませて堪るものと平家の侍百騎ばかり、中にわつて入りまじりましたが、どうすることも出来ません。

重盛を中にかこんだま、大庭の椋の木を中にして、右近の櫻、左近の橘のほとりを、くるくると七八回も逃げまはるのであります。

十七騎に追ひまくられた五百餘騎、叶はじと思つたか、表の方へさつと引上げてしまひました。

「重盛弓杖ついて馬の息をつがする所に、筑後守家貞つと参りて、云々」

此の段は義平の奮戦と其の武者振で、此の文の山です。

大將重盛、ほつと一息してゐるところへ、筑後守家貞が近寄つて、

「平將軍貞盛公のお生れがはり、あ、天晴な武者振かな。」

と、ほめあげたので、も一度かけて、家貞に見せようと思つた重盛、新手の五百騎を引連れて、又もや大庭の椋の木まで押寄せました。

義平きつと之を見て、弓を小脇にかいばさみ、鍔ふんばりつゝ立ち上り、兩手をひろげて大音聲。

「我は源氏の嫡男なり、御身も平家の嫡男なり、丁度似合つた好敵手、いざ寄り給へ組討せう。」
名乗もあへず追っかけます。

此の荒武者に組み伏せられては堪りません。重盛は又大椋の周りを五六度まで、命の限りに逃げ廻ります。蹄の音がカツ／＼と、後に追つて聞えます。捕へられては一大事、馬の頭を立て直して又もや大宮表へさつと引上げました。

後には悪源太義平は二度まで敵を追まくつたので、弓杖ついて馬に一息いれてゐるところへ、父義朝の怒り聲、

「やあ義平、汝が手ぬるく防ぐ爲、度々敵は攻め入るぞ、あれ早く追ひ出せ。」
との言付です。

「お、」と答へた悪源太、

「進めや者共！」と差圖して、表の方へ駈け出して、五百騎の中へ面もふらず割つて入りました。大將義朝に叱られて、奮ひ立つた十七騎です。

此の度こそ逃しはせじと、何處までも何處までも追っかけます。

大宮表を下りて、二條通のあたりを砂烟あげながら追っかけて行く後姿の勇しさ、

義朝はるかに見送りながら、

「我が子ながらも源太はよく駆けたり、あゝ駆けたり〜。」
と打ちほ、笑みしました。

まるで繪を見るやうな戦です。

補充文には「保元物語」から「白河殿の夜討」をあけておきませう。

白河殿の夜討

白河殿にはかくともしろしめさざりしかば、左大臣殿、武者所の親久を召されて、「内裏の様見て参れ」と仰せければ、親久即ち馳せかへり、「官軍既に寄せ候」と申しも果てぬに、先陣既に馳來る。その時鎮西八郎申しけるは、「爲朝が千度申しつるはここ候、ここ候」と忿りけれども力及ばず。爲朝を勇ませむ爲にや、俄かに除目行はれて、藏人たるべき由仰せけり。八郎、「これは何といふ事ぞ敵既に寄せ來るに、方々の手分をこそせられむずれ、只今の除目物騒なり。人々は何にもなり給へ、爲朝は、今日、藏人と呼ばれても何かせむ、只もとの鎮西八郎にては候はむ」とぞ申しける。

さる程に安藝守清盛は三條へうち下り、河原を馳渡し、隄を上りに北へ歩ませて、二條河原の東

隨にぞ控へける。その勢の中より五十騎ばかり、先陣に進んで押寄せたり、「こゝを固め給ふは誰人ぞ、名のらせ給へ。かく申すは安藝守殿の郎等に、伊勢國の住人、古市伊藤武者景綱、同じき伊藤五・伊藤六」とぞ名乗りける。八郎これを聞き、「汝が主の清盛をだに合はぬ敵と思ふなり。平家は柏原天皇の御末なれども、時代久しく、なり下れり。源氏は誰かは知らぬ、清和天皇より爲朝までは九代なり。六孫王より七代、八幡殿の孫六條判官爲義が八男、鎮西八郎爲朝ぞ。景綱ならば引退け」とぞ宣ひける。

景綱、「昔より源平兩家天下の武將として連戦の輩を討つに、兩家の郎等大將を射ること互にこれあり。同じ郎等ながら、公家にも知られ参らせたる身なり。下郎等の射る矢、立つか立たぬか、御覽せよ」と、能つ引いて射たれども、爲朝これを事ともせず「合はぬ敵と思へども、汝が詞の優しさに、矢一つ賜はらむ、受けて見よ。且つは今生の面目、又は後生の思ひ出にせよ」とて、三年竹の節近なるを少し押磨いて、山鳥の尾を以て矧きたるに、七寸五分の丸根の、篋中過ぎて篋代のあゝるを打食はせ、暫く保ちてひやうと射る。眞先に進んだる伊藤六が胸板かけず射通し、餘る矢が伊藤五の射向けの袖に裏かいてぞ立つたりける。六郎は矢場に落ちて死にたりけり。

伊藤五この矢を折りかけて、大將軍の前に参つて、「八郎御曹司の矢御覽候へ、凡夫の所爲とも覺え候はず。六郎既に死に候ひぬ」と申せば、安藝守を始めてこの矢を見る兵ども、皆舌を振つてぞ

恐れける。景綱申しけるは、「かの先祖八幡殿、後三年の合戦の時、出羽國金澤の城にて、武則が申しけるは、「君の御矢に中る者、鎧・兜を射通されずといふ事なし。抑々君の御弓勢を慥かに拜み奉らばや」と望みければ、義家、革よき鎧三領重ね、木の枝に懸けて、六重を射通し給ひければ、鬼神の變化とぞ恐れける。これより彌々兵ども歸服しけりと申し傳へて聞けばかりなり。眼前にかゝる弓勢も侍るにや、あな怖ろし」とぞおぢあへる。

かく口々にいはれて、大將宣ひけるは、「必ず、清盛がこの門を承つて向ひたるにもあらず、何となく押寄せたるにてこそあれ。何方へも寄せよかし。さらば東の門か」とあれば、兵皆、「それもこの門近く候へば、もし同じ人や固めて候らむ。たゞ北の門へ向はせたまへ」といへば、「さも言はれたり。今は程なく夜も明けなむず、然れば小勢にて大勢駆立てられむも見苦しかりなむ」とて引退く所に、嫡子中務少輔重盛、生年十九歳、赤地の錦の直垂に、澤湯（たまたか）威の鎧に、白星の兜を著、二十四差したる中黒の矢負ひ、二所籐の弓持つて、黄河原毛なる馬に乗り、進み出でて、「救命を蒙りてまかり向ひたる者が、敵陣こはしとて引返す様やあるべき。續けや若者」とて駆出でられけるを、清盛これを見て、「有るべうもなし。あれ制せよ、者ども。爲朝が弓勢は目に見えたる事ぞかし。あやまちすな」と宣ひければ、兵ども前に馳せふさがりければ力なく、京極を上りに春日表の門へぞ寄せられける。

爰に安藝守の郎等に、伊賀國の住人山田小三郎伊行といふは又なき剛の者、かたかは破りの野豬武者なるが、大將軍の引き給ふを見て、「さればとて、矢一筋に恐れて向ひたる陣を引くことやある、たとひ筑紫八郎殿の矢なりとも、伊行が鎧はよも通らじ。五代傳へて軍に遺ふこと十五箇度、我が手に取つても度々多くの矢どもを受けしかど、未だ裏をばかかぬものを。人々見給へ、八郎殿の矢一つ受けて物語にせむとて駆けいづれば、「をこの功名はせぬに如かず、無益なり」と同僚ども制すれども、元よりいひつる言葉を返さぬ男にて、「夜明けて後に、傍輩の、「いで矢目見む」といはむには、何とかその時答ふべき。然れば日頃の功名も失せなむ事の無念なれば、よしよし、人は續かずとも、おのれ證人に立つべし」とて、下人一人相具して、黒革威の鎧に、同じ毛の五枚兜を猪頸に著、十八差したる染羽の矢負ひ、鎧籠籠の弓持ち、鹿毛なる馬に黒鞍置きて乗つたりけり。門前に馬をかけず、物そのものにはあらねども、安藝守の郎等、伊賀國の住人、山田小三郎伊行、生年二十八、堀河院の御宇、嘉承三年正月二十六日、對馬守義親追討の時、故備前守殿の眞先かけて、公家にも知られ奉りし山田庄司行末が孫なり。山賊・強盜を搦め捕る事は數を知らず、合戦の場にも度々に及びて高名仕りたる者ぞかし。承り及ぶ八郎御曹司を一目奉見らばや」と申しければ爲朝「一定きやつは引備けてぞいふらむ。一の矢をば射させむず、二の矢を番はむ所を射おとさむず。同じくば、矢のたまらむ所を、我が弓勢を敵に見せむ」と宣ひて、白蘆毛なる馬に金鞞輪の鞍

置きて乗りたりけるが、かけ出でて、「鎮西八郎これにあり」と名乗り給ふ所を、本よりひき備けたる箭なれば、弦音高く切つて發つ。御曹司の弓手の草摺を縫様にぞ射切つたる。一の矢を射損じて二の矢を番ふ所を、爲朝よつびいてひやうと射る。山田小三郎が鞍の前輪より鎧の草摺を尻輪懸けて、矢先三寸餘りぞ射通したる、暫しは矢にかせられてたまる様にぞ見えし、即ち弓手の方へ眞逆様に落つれば、矢尻は鞍に留まりて、馬は河原へ馳行けば、下人つと走寄り、主を肩に引掛けて身方の陣へぞ歸りける。寄手の兵これを見て、彌々この門へ向ふ者こそなかりけれ。

第三十課 興國の民

興國的發展的の國民として具備すべき特性を散叙式に列舉したもので、一見座右銘と云つた形です。

従來の讀本にも出てゐた教材で、「元氣旺盛」に始まり、「至誠奉公」に終るまで、項を分つこと十三、私徳あり、公德あり、個人あり、社會あり、國家あり、興國日本の民として具備すべき本質特性の總べては、僅々二百餘字の間に盡されてゐます。

文は全然散叙式で、各節毎に夫々纏つた思想を現してゐますから、一節づゝ讀ませては話

し話しては讀ませして、其の間適宜に附説を加へ、具體化して取扱ふの用意がなければなりません。参考のため徳富蘇峯の「大和民族の思想」と、高山樗牛の「少年に寄語す」とを擧げて置きませう。

大和民族の理想

國民も猶個人の如し。寸刻も理想なくして、精進する能はず。國民的向上を必要とせざれば已む、苟も其の必要ありとせば、吾人は須く其の理想を尋繹せざる可からず。敢へて問ふ、我が大和民族の理想とは何ぞや。

忠君愛國は、日本國民一般の宗教なり。如何なる理想の系統に屬する者も、此の一點に於て一致を見出すなり。佛教徒も、神道者も、基督教徒も、乃至は所謂無宗教者も、均しく此の點に於て綜合せらるゝなり。而も此の忠君愛國の精神を發揚するの抱負如何。

横井小楠は、「富國に止まらず、強兵に止まらず、大義を四海に布かんのみ。」と云へり。これ良に世界を狹しとする抱負にして、彼の志趣の大にして、六合の中に飛躍したるを見るに足るも、然も尙語りて詳かならず、觀て精しからざる憾なしとせず。所謂大義を四海

に布くとは何ぞや。吾人は彼を九原に作して之を細論する能はざるを惜しむ。

東西文明を融和して、黄白人種的境界を一掃す可しとは、吾人が屢々耳にする所なり。されど我が國民の總べてを擧げて、此の如き理想を有するを得可きか。學者には、意義明白なる題目ならんも、國民的大題目としては、餘りに架空に、餘りに高遠に、小楠の所謂大義を四海に布く者と同一ならんことを虞る。

若し吾人をして所見を陳ぜしめば、只一あるのみ。曰く、白閥打破これなり。而して只これなり。打破とは何ぞや。其の閥を打破するなり。白人を打破するにあらざるなり。吾人は白人彼自身が、吾人の言論に驚愕して、此の區別を混同するなからんことを豫め警告すると同時に、我が同胞にも亦精明に、此の區別を看取せんことを要求せずんば非ず。吾人豈排外思想を鼓吹する者ならんや。蓋し東西文明の融和も、黄白人種境界の一掃も、彼我對等の交際より始めざる可からず。白閥打破は其の第一歩なり。

協和も、提携も、對等の交際の後なり。若し對等の交際を待たずして協和せんか、協和にあらず降服なり。提携せんか、提携にあらず服従なり。東西文明の融和も結構なり。黄白人種無差別も有難し。然も是唯兩者が對等の位地を占めて、而して後之を行ふを得る

のみ。學者の議論としては、如何に實際と縁遠きも妨げず。されど國民的大題目としては、少くとも之を實行的距離に置かざる可からず。白閥繁昌の世の中に、四海兄弟の説教も、聊が大早計たらざるなきか。我等の公平無私なる議論も、彼等の耳には弱者の泣言と聞え、徒に公論に託して、自己の利益を保持せんとする哀訴嘆願と聞ゆるに過ぎず。此の如くして何の日にか大義を四海に布く可きぞ。

吾人は攻撃的防禦にあらざれば、防禦の目的を達す可からずと云へり。我が國民にして、此の白閥打破の一大決心、一大覺悟あり、而して後聊か大和民族の爲に氣焰を吐くを得可きのみ。若し吾人の觀察にして大過なからしめば、彼の世界兄弟の論は、餘りに白閥の跋扈に辟易し、其の保護色の下に隠れんと欲するにあらざるなきか。東西文明融和論者も、到底競争の難きを自覺して、體の善き遁辭を作りたるにあらざるなきか。果して然らば、其の言徒に誇大にして、其の氣頗る饒るるものにあらずや。

惟ふに藩閥打破は、我が維新當初以來、民論の合言葉なりき。如何に其の有力なりしかは、今尙之を藉りて、政界に横行せんとする者あるによりても知らるゝなり。此の如くして我が國民は、政權を二三藩閥者流より之を天下に分配するを得たり。然も白閥の勢力は

藩閥の比にあらず。大和民族の眞價を試煉するは、只此の理想を如何なる程度まで達し得べきかにあり。吾人は白人を敵視せず、白人を憎惡せず。彼等若し我等を兄弟とせば、我等亦彼等を兄弟とせむ。彼等若し我等を親愛せば、我等亦彼等を親愛せむ。所謂白閥打破とは、彼等と平等界に協同生活を楽しむの順序のみ。

少年に寄語す

凡そ天下の事、無責任の慷慨より容易なるは無し。人已に背き、事意の如くならざれば、輒ち嘲罵を以て自ら遣る。名は慷慨と稱し義憤と云ふとも、實は則ち不平のみ。多くの場合に於ては、陋劣なる主我的感情より來る所の不平のみ。是の如き慷慨又は義憤の幾百千を積聚すとも、徒に世を亂り人を誤るの外、世道人心に何の裨益かあらん。眞に世を憂ふるものは、徒に慷慨して已むべきにあらず。世豈戰を宣告して、逃避するものあらんや。吾人は救済の方法を解せずして、徒に慷慨を事とするもの、無責任を憫まずんばあらず。少年口を開けば輒ち言ふ、「人は墮落せり、世は腐敗せり、名教地に落ち、彗倫盪然たり、一大革新なかるべからず。」と、言や壯ならざるに非ず、吾人希はくは少年諸子と共に現世

の腐敗を承認せん。唯少年諸子にして是を言ふ、果して可ならんか。吾人は慷慨を惡しと謂はず。心の清き者は、偽善を惡まざるを得ず。人の正しきを好む者は、不義を憤らざるを得ず。慷慨・義憤は人情の最も麗しき發動として、吾等を少年諸子に見るを喜ぶ。唯其の位に居らずして之を言ふを咎むるのみ。吾人は、少年の本領他に在りて、此に在らざるを告げんと欲す。

少年の時代は修養の時代なり。學識を蓄へ、閱歷を積み、品性を養ふ時代なり。彼は、道徳上に於ても、法律上に於ても、一個人たるの責任を有せざるなり。一個人の責任を有せざるは、即ち天の假貸せる修養の時代なればなり。彼は實務の人にあらず、社會の人にあらず、所謂部屋住の人なり。他日、實務の人、社會の人としての、完全なる資格を得んが爲の準備時代にある者なり。青春幾時ぞ。彼は此の準備の爲に當に日も亦足らざるべし。何の違ありてか空言を弄して、其の本領を顧みざらんとする。社會は少年の慷慨によりて、毫も益を受くるものにあらず。少年自らは却つて是が爲に大損害を被らん。かへすがへすも、心得違と謂はざるべからず。

快濶・進取・樂天は少年の生命なり。完全なる人生の開發は、此の生命ありて始めて望み

得べけん。不健全なる慷慨は、動もすれば人を憂鬱にし、誤嬰にし、厭世にす。是の如きは、少年にありては、即ち精神的に死せるなり。吾人最も是を恐る。

女子用 第八課 雀

一寸目新しい教材です。

原文はツルゲエネフの散文詩で、生田春月氏の譯「ツルゲエネフの散文詩」の中に出てゐます。左に其の原文と譯文とを擧げておきます。

Der Sperling

Ich kehrte von der Jagd zurück und ging durch die Gartenallee. Mein Hund lief voraus. Plotzlich verzögerte er seine Schritte und begann zu schleichen, als witterte er vor sich ein Wild.

Ich blickte die Allee hinunter und gewahrte einen jungen Sperling mit gelbem So nabelrande und jugenm flaum auf dem kopfe. Er war aus dem Neste gefallen

— ich kräftiger Wind schüttelte die Birken der Allee— und unbeweglich sass er nun da, indem er die kaum hervorgewachsenen flügelchen hilflos von sich streckte.

Langsam näherte sich ihm mein Hund, als sich plötzlich vom benachbarten Baume ein alter, schwanzbrüstiger Sperling losriss, wie ein Stein gerade vor seiner Schnauze niederstürzte und ganz zerzaust und verstört mit verzweifeln, kläglichem Gekreisch sinige Male gegen den weitgeöffneten, mit grossen Zähnen besetzten Rachen lossprang.

Er wollte sein Junges retten, er Schirmte es mit seinem eigenen Körper……sein ganzer winziger Leib bebte vor Schrecken, sein Stimmchen ward wild und leiser, er starb hin, er opferte sich!

Welch ein gewaltiges Ungeheim musste der Hund ihm sein! Und gleich wohl vermochte er nicht dort oben auf seinem sicheren Ast zu verbleiben, Eine Gewalt, welche stärker war als sein Wille, riss ihn hinweg.

Mein Tresor blieb stehen undh wie dann urück. Offenbar musste auch er jene

Gewalt anerkennen. Ich rief den verdutzten Hund zu mir und entfernte mich mit einem Gefühl der Erfurcht.

Ja, lachet nicht, ich empfand wirklich die Erfurcht vor diesem kleinen heldenmüthigen Vogel, vor dem leidenschaftlichen Ausdruck seiner Liebe.

Die Liebe, dachte ich, ist doch stärker als der Tod und die Todessangst. Nur durch die Liebe erhält und bewegt sich das Leben.

雀

私は獵から歸つて、庭園の並木道を歩いてゐた。犬は前を走つてゐた。

突然犬は刻み足になつて、獲物を嗅ぎ附けたやうに忍んで歩き出した。

私は並木道を見遣つて、嘴の黄色な頭の上に毳毛わたげの生えた一羽の子雀を認めた。巢から落ちたのだ（風はひどく並木の樺の樹をゆすぶつてゐた）そして其處にちつとすくんだ儘、彼はまだ生え切らない翼を徒らにばた／＼させてゐた。

犬がそつとそれに近づいて行つた時、突然直ぐ傍の樹から、喉の黒い親雀が丁度小石のやうに犬のついで鼻先に飛下りた。そして全身ぶる／＼顛へながら、あはれな絶望の叫びを擧げて、彼は齒列

のきらめく開いた口の方へ二三度飛びかゝつた。

彼は助けようと思つて、身を以て難をかばつたのだ……けれども其の小さな全身は恐怖のために戦き、其の聲は怪しう嘎れてゐた。恐ろしさに氣を失ひながらも、彼は身を投げ出したのだ。

彼の眼には犬はどんなにか大きな怪物に見えたに違ひない！ それでも、彼は安全な高い枝に止まつてゐる事は出来なかつた……その意志よりも強い力が彼を飛び下りさせたのだ。

私のトレンソルはちつと立止まつてゐたが、後退りした……彼もまた此の力を認めたに違ひない。私は急いで面喰つてゐる犬を呼んで、敬虔の念に打たれて立去つた。

さうだ笑つてはならない。私はこの小ささを悲壯な鳥に對して、その愛情の衝動に對して、たしかに敬虔の念に打たれた。

私は思つた、愛は死よりも死の恐怖よりも強い。たゞそれによつてのみ、愛によつてのみ、人生は維持され、進歩するものであると。

ツルゲエネフの散文詩は、詩の衣裳をまとうた哲學であり、且つ憂鬱な露西亞の天才が生の懺悔なであります。しかも其の一つ／＼には、彼が全作品を一貫してゐる總ての特色がコンデンスされてゐると云つても差支ないのであります。

ツルゲエネフの晩年に就いて生田春月氏は、

ツルゲエネフの晩年は、あゝ何等の苦痛、何等の孤獨！ 彼は丁度かの獨逸の薄倅なロマンチスト、彼が青年時代に心酔してゐたかのハイリツヒ・ハイネと相似たる運命に遭遇した。丁度同じ巴里で丁度同じ *Death in Life* を彼は送らねばならなかつた。そして彼は絶問なしに考へた。既想した。回想した。常に人生の謎に面して、人生の最後の大きな謎、——死に相面して、それ故此の悲痛な詩篇！ 然り、この詩篇を読む人は、この作者がかゝる境遇にあつたことを考へなくてはならない。彼が多年敬愛してゐて、その遺産の相続人に定めたヴィアルド夫人、彼のために無くてはならぬ人であり、彼に對して骨肉も及ばぬ世話を見てくれたそのヴィアルド夫人すら、後にはさまでの注意を拂はなくなつたのである。そして彼の孤獨に愈々孤獨にその二階に寝てゐたのだ。この事を想うてこの作品に對する時、一層力強く動かされずにゐられない！

ツルゲエネフは、この五十篇を發表した翌年即ち一八八三年にその第二の故郷なる巴里で逝いた——年は六十五才であつた。

と叙してゐます。尙春月氏は同詩集を読むものゝ爲に、次のやうな有益な注意を與へてゐます。

ツルゲエネフの散文詩を読む人の爲に

此の老年の憂鬱と未だ消滅せざる青春の若々しさとのあやしく織り交ぜられてゐる美しい哲學、深遠な詩のエッセンスたる小さな力ある書物は、ツルゲエネフがその晩年の五年間（一八七八年——八二年）に、自身の並びに社會の日常生活を觀察し思考するの餘、折りにふれてそのノオトに書き留めて置いた寫生や空想や考察の中から、五十篇だけを選んで、一八八二年、露西亞の大雜誌「歐羅巴の使ひ」(ウエストニク・エフロビイ)の十二月號に於て發表したものである。その主筆のもとに送られた原稿には、もと何等の題も指定されてゐなかつた代り、その表紙に覺え書きめかしく *Zenilia* と云ふ一語が書き流してあつた。これは羅匈語で考衰の義である。されば嗚外博士もこれを「耄語」と譯してゐられたやうに覺えてゐる。獨譯者ランゲは云ふ、ツルゲエネフは人も知るが如く、極めて謙遜な人である、それ故にこの過謙の語を書き記したものであらうが、然しこの作品には最も適當しないものである、何故と云ふのに、これには精神的老衰の痕跡すらも認められないからであると。そして彼は前記雜誌の主筆スタシユレキツチが、作者の手紙の中に記され

てゐる「詩文詩」と云ふ言葉を此の無韻ではあるが眞に詩的な考へ深い作品の表題に定め
たのを頗る當を得た處置だと云つて、自らその名によつて獨譯を發表した。此譯にも散文
詩の名を棄て得なかつたのは、それが既にこの名によつて一般に知られてゐるのと、今一
つは散文詩なる文字に對する一種の愛着からであつた。けれども、ツルゲエネフが殊更に
非常な謙遜な題を眼中に置いてゐた事だけは述べて置く必要があると考へる。

ツルゲエネフはその原稿に添へて、スタシユレキツチに與へた手紙の終りに左のやうに
記してゐる。

「……讀者が此の「散文詩」を一息に續過しないやうにと望みたい。でない、その結果
は恐らく退屈を來して、——そして「歐羅巴の使ひ」はその手から取落されてしまふだら
う。むしろ一篇づゝ讀んで頂き度い、今日はこれ、明日はあれと云ふ風に、——さうした
ならば、多分その中から何物かゝその胸に刻み込まれるであらうと思ふ。……」
と、全くこのやうな作品は一度や二度卒讀したのみでは十分でないのである。靜かな瞑
想の中から生れたものは、また靜かに落着いて味はれなければならない。

これは春月氏が特に同詩集を讀むものゝ爲に物した註釋の一節ですが、この教材の取扱者
としては是非讀んでおかなければならぬ必讀の文字です。

教材の筋は獵の歸りに庭の並木道で、巢から落ちた憐れな小雀がゐるのを見た。連れて行
つた犬が先づそれを發見して、小雀の側に近寄ると、突然直ぐ側の木の上から親雀が喋のや
うに飛下りて來た。そして全身の毛を逆立て、犬の口を目かけて飛びかゝつた。犬は意外の
出來事に驚いて、ちよつと面喰つて、ぢつとそれを見詰めてゐる。主人公は其の悲壯な有様
を見て、何とも言へない憐れさを感じて、まご／＼してゐる犬を呼戻して其の場を立去つた。
——といふのです。如何にも平易な教材ですが、宜く味つて見ますと、其の間かなり深い
思想が織込まれてゐます。

舊讀本の卷の四に出てゐた「愛」を具體化したやうな教材で、一讀何人も思はずホロリと
させられませう。

愛

燒野の雉、夜の鶴、さては乳虎の怒、紙積の愛、子を思ふ情は禽獸にも備れり。旅雁の空に叫ぶ

も、牧羊の野に呼ばふも、友を呼ぶ親愛の聲にあらざるは無く、やがては外敵に對する警告にてもあるべし。げに愛は團體の結合力にして、道德の主なる要素たるなり。

愛は己を思ふ情を推して他に及すに外ならず。己の苦を除かんとする心を擴めて人の苦を除かんとし、己の樂を得んとする心を擴めて人に樂を得せしめんとする同情の心なり。此の同情心はの親に對しては孝となり、子に對しては慈となり、夫婦の間にては和となり、兄弟の間にては友となる。一般尊長に對して愛敬し景慕するの心も亦其の發現といふべし。更に之を擴めては愛郷心となり。愛國心となり、又社會公衆に對する愛となる。慈善・仁惠・哀憐等皆愛の種類にして、宥恕・愛撫・慰藉等愛の發動にあらざるはなし。

一代を師導して百世の儀表となれる偉人は、皆弘く愛を宣傳して、人類の幸福を進めんとしたるものなり。孔子・釋迦・基督の如きは皆然り。我が國御歴代の御仁慈は申すも畏し。各國代々の宗教家・教育家・道德家の事業も究極する所亦一に歸す。

愛は萬物を生育する太陽の光に比すべく、愛ありて始めて人生の妙味あり。社會の平和を得るも國家の安寧を保つも、愛の結合力に頼れり。愛なくば何の處にか社交の愉快あらん、何の處にか家庭の和樂あらん。

愛の情はかくの如く貴く、愛の力はかくの如く大なり。然れども若し自然の發動に任せんか、此

の貴ぶべき情も却つて恐るべき弊害を醸すことあり。又博く他人を愛せんとして、却つて其の親しきものを顧みざるが如きは宜しきに適へりと謂ふべからず。愛情は常に明確なる智力と鞏固なる意志とを以て節制を加へざるべからず。愛情は養ふべく、愛情には溺るべからず。西洋の諺に曰く、「愛は盲目なり。」と。

此の教材の趣旨も矢張之と同じで、「愛は盲目なり」と云つた思想を、此の可憐な小雀の話によつて知らしめようと云ふのであります。

教材の趣旨は末段の「愛は死よりも、死の恐怖よりも強い。——云々」のあたりにあつて私は此の小さな鳥の悲壯な態度に對して、云々は同時に讀者の讀了の感なのであります。補充文には同じ「ツルゲエネフの詩集」の中から、次の「犬」と「乞食」の二つを擧げておきませう。

犬

部屋の中には私達二人、犬と私と……戸外には恐ろしい嵐が吹き荒んでゐる。

犬は私の前にすわつて眞面目に私の顔を見守つてゐる。

私もまた犬の顔を見てゐる。

犬は何か云ひたけにしてゐる、彼は黙つてゐる、言葉が無いのだ、自分で自分がわからないのだ——けれども私は彼の心を知つてゐる。

私は此の瞬間に彼にも私にも同じ感情があつて、私達の間には何の差別無いことを知つてゐる。私達は同じ生物だ。何方にも同じ顔へる火花が燃え輝いてゐるのだ。

死はその冷たい廣い翼を羽搏いて落ちて来る……かくて萬事休す！

誰かその時私達二人の心に燃えた火花の差別を立て得ようぞ？

いな！ 互に見交す二人は獣と人間ではない……互にちつと見交してゐる眼は同等な物の眼なのである。獣にも人間にも、同じ生命が恐れ戦きつゝも互に寄り添ふてゐる。

一八七八年二月

乞食

私は街を歩いてゐた……老衰した乞食が袖を引いた。

血走つて涙ぐんだ眼、蒼い唇、ひどい襤褸、腫んだ傷……あゝ、何たる忌はしい貧窮が

此の悲惨な人間に食ひ込んだのであらう！

彼はむくんで赤くなつた汚ない手を私に差出した。彼はうめいて、ぶつくと施しを乞ふた。

私は衣囊を残らず探しはじめた……財布も無い、時計も無い、ハンケチすらも無い……何一つ持つて出なかつたのだ。それに乞食はまだ待つてゐる。……彼の差出した手はぶる／＼と顔へてゐる。

はたと當惑して、私は此の汚い顔へる手をしつかり握つた。……「君、宥してくれ、僕は君、何も持合せてゐないんだ。」

乞食はその血走つた眼を私に向け、蒼い唇に微笑を含んで、彼の方でも私の冷たい指を掴んだ。

「そんな事を、貴下」と彼は呟いた、「これも有難いので、これも施物でございます、旦那」

私もまた彼から施物を得たのを感じた。

一八七八年二月

女子用 第九課 歸宅の日取を聞合はす

筋は至つて簡單ですが、書きぶりは可なり大人びてゐます。里のお祖父さんの病氣で見舞に行つてゐるお母さんに對して、留守居をしてゐた娘が歸宅の日取を聞き合した手紙で、手紙を出した娘は先づ女學校卒業位の年嵩です。普通でしたらもう少し砕けた口語で行くべきところですが、こゝでは特に候文體の手紙を読ませたいといふ要求から、文語でしかも固苦しい形になつてゐます。ですから何處までも讀解を中心にして、斯うした形の文體に親しませるやうに仕向けなければなりません。

「御出發後とかく雨勝ちに御座候處御地は如何に候や、云々」

手紙の取扱では、先づ手紙を出した人と、手紙を受取る人との關係を明にしなければなりません。兩者の關係が明になつて、其の場合もはつきりして來ますし、兩者の間の情味も起きて來ませう。こゝでは里方の父の病氣で、取る物も取敢へず家の事を娘にまかせて、看護に行つてゐる母親に對して、留守居の娘からはるる尋ねて來た親族のことを知らして遣つ

たことになつてゐます。北海道から尋ねて來た夫婦は、先づ父方の親族とでも想定させようか、すると母親に對しては義理ある關係です。さうした關係の親族夫婦が突然の來訪を知らせると共に、母親の歸宅の日取を問ひ合せたのであります。

手紙の取扱では、先づこゝらの關係を吟味させることが大切で、そこらの事情を明にすることによつて、文に含まれた情味も一段と趣きを添へて來ませう。

冒頭の「御出發後とかく雨がちに御座候處」に梅雨期の陰鬱な天候を想像させ、「一昨日着の御葉書によれば云々」に祖父の病氣が快方に向つてゐることを思はしてゐます。

此の手紙の上から想像して見ますと、母親は父の病氣と聞いて、取る物も取敢へず、里方に出掛けて看護してゐるうちに、病氣も順調に進んで、其のうち歸宅すると云つたやうなことを知らして來たものだと思はれます。「殊に母上様には久々にての御いでとて御病人もさぞかし御喜びなされ候事と存候云々」といひ、「御留守中誰も誰も變りなく次郎も毎日元氣よく遊び居り候へば云々」といひ、主婦氣取でゐる娘の氣持も想像されて情味たつぷりです。

「さて昨日突然北海道の鈴木様御夫婦にて御いでなされ候が云々」
此の段は本文で、此の手紙の主な用件です。

留守居中突然北海道から親族の者が來訪したので、其の知らせや其の來客が是非母に會ひたいと言つてゐることなどを知らして、歸宅の有無を問ひ合したのです。母上様の御不在にて非常に落膽なされ云々」といひ、「御滞在は月末までの御見込の由にて云々」といひ、殊に後半の「御病人の御様子にもよる事に候へば云々」と云つたあたり、情緒綿々、しかも簡單にして頗る要を得てゐます。

補充文には芳賀矢一氏の「女子國文」から、次の「父の許へ」を擧げておきませう。

父の許へ

一筆申上候今日は御父上様の御誕生日なればいつもよりも早起いたし顔を洗ひ髪も結直し故郷の空はるかに仰ぎて心の中に御祝ひ申上候去年までは御膝下に居て皆様と御一緒に御祝ひ申上候が今年はその事の叶はぬを心苦しく存候へども學問いたす身には止むを得ぬ事とあきらめ申候

かく御側を離れ居候ては尙更御なつかしく御恩のほどしみ身にこたへ日に一度は御寫眞取出して御目にかゝるを樂みに致し朝食後取出しては今頃は宅のあの處に御すわりなされ烟管をあのやうにして煙草御ふかしあそばすならんなど思ひまゐらせ夕飯の後には今頃ははや御休みなされ候か

など思ひ出でてはいつか我が身も御側に居るかの思いたし候御友達は多けれども兩親のそろひ居る人は少く私は始終うらやまれ居候かくうらやまるにつけてもますく嬉しく勉強して居るうちにもふと郷里のことおもひいだしては御父上様も御母上様も御機嫌よく入らせらるゝこと、何となく心丈夫になりて勉強するにも張合が出來何卒よき成績を取りて一言よく出來たと御賢にあづかり度と勇み立ち候此のほども修身の時に先生より、

明治天皇の御製

たちねのみ親のをしへあら玉の

としふるまゝに身にぞしみける

といふを承りおもはず落涙いたし候此の頃は何となく時候も不順に御座候へば精々御養生あそばし御息災にていづこまでも今日の御祝ひ申上げられ候様にと神かけて祈り居候今日は夜分に認むる筈の處あまりの御つなつかしさに課業がすむとぞ書きつけ取りあへず御祝の詞のみ申上候 かしこ

月 日

花 よ り

御父上様 御許に

尙ほ此の度は取りいそぎ候まゝ御母上様始め皆様へば御無沙汰いたし候いづれ其の内に又申上ぐべく候

女子用 第九課 歸宅の日取を詔合はす

女子用 第十課 小野寺十内の妻

舊讀本卷の三に出てるた教材其の儘です。男子には男子らしいナポレオンを配し、女子には女子らしい小野寺十内の妻丹女の事蹟を讀ませようと云ふのであります。

小野寺十内の妻丹女は、名を丹子といひ、里方は灰方氏、性温良にして義氣に富み、且つ頗る和歌を能くしてゐました。赤穂に事起るや、丹女は獨り京師に止つてゐましたが、十内父子の忠死を聞き、辭世の歌、「夫や子の待つらんものを急がまし、何か此の世におもひ置くべき。」と賦し、食を絶つて死しました。時に元祿十六年六月十八日でした。

小野寺十内は、名を秀和といひ赤穂四十七義士の一人です。祖十太夫初めて赤穂に仕へ、父を又八といひました。秀和は淺野長矩に仕へて百五十石を食み、京都の留守居となりました。國難起るや家人に告げずして藩に歸り、次いで又京に到りました。大石良雄等屢々其の寓を訪ひ、復仇の事を謀りました。明年江戸に赴き、醫師の風を裝ひ、名を仙北十菴と改め、或は又四郎と稱して、秘かに敵狀を探りました。死する時年六十一、義士復仇の報京都に至

るや、彼を知るものは皆十内も必ず其の中にあらんと噂してゐました。十内學を好み、伊藤仁齋に就いて學びました。又和歌を嗜み、流離の間といへども吟詠を輟めず、其の盟に加はるや、「わすれめやもゝに餘れる年をへて、仕へしよゝの君が情を」の一首を賦しました。これは祖十太夫以來、世祿の恩を受けたのを感じて詠んだものでせう。元祿復仇の際は謀臣として常に其の機密に參畫し、義徒の間に重きを成してゐました。

つみや子の待つらんものを急がまし

何か此の世におもひ置くべき

此の哀なる一首を辭世にして、夫と子との後を追へるは、云々

冒頭の一段は丹女の略歴で、實家の總べてが不臣であつたに拘らず、能く夫を佐け子を勵まし、十内父子をして義人の名を成さしめるに至つたことを叙してゐます。

幸右衛門秀富は十内の姉の子で、本姓は大高氏、忠雄の弟です。父十内に従つて江戸に在り、仙北又介と稱して敵情を探りました。復仇の際、秀富豫てから吉良の臣に射を能する者多きを聞き、直に進んで闇に入り、悉く弓弦を絶ち、敵をして乗するの暇なからしめたので其の名を知られてゐます。死する時年僅かに二十八、

「四十七人の義士何れもすぐれたる人物なるが中に、秀和は文學の道にも暗からず。云々」此の段は十内夫婦が和歌に秀でてゐたことを叙して、其の歌の二三を擧げてゐます。

咲初むる外山の櫻にほひ來て

人おどろかす春のあさ風

「外山は」は「端の山」の意で、奥山に對して端にある山の稱です。櫻が咲いてからは、吹く風にも心を痛めると云ふ意味なのであります。「人おどろかす」に言ひ知れぬ味があります。

暮れて行く秋といはせの山風に

もみちかつ散る音のさびしさ

もみちの散るのを見て詠んだ歌で「秋といはせ」の「いはせ」は、地名の磐瀬と「暮れて行く秋」の二つに懸つてゐます。

秋ももう暮れて行くと云ふことを物語顔に、あれあのやうに此處彼處に紅葉がはらくと散つてゐる。まあ本當に淋しいことだ。——と云ふのであります。

別れてもまたあふ坂を頼まねば

たぐへやせまし死手の山ごえ

十内が江戸へ下る時、逢阪山を越えた際に詠んだ歌です。「またあふ坂を」の「あふ」は、逢阪山の「あふ」と再び、廻り會ふの「あふ」の二つに懸つてゐます。

今自分は逢阪山を越してゐるが、此處を越したらもうまたと再び會ふことが出來ない。だからこゝは逢阪山とは言ふが、私には丁度これが死手の山を越えてゐるやうな氣がする。——と云ふのであります。京に残した丹女に對して、別離の情を叙した歌なのです。

故郷に斯くてや人の住みぬらん

ひとりさむけに志賀の浦松

近江の志賀のあたりを過ぎた際に詠んだ歌で、松に寄せて思を述べた歌なのです。

私は今千萬無量の思をして此處を過ぎてゐるが、京に残してゐる妻もやはり斯んな氣持で淋しく暮してゐるだらう。丁度あの松のやうに、——と云ふのであります。京に残した妻をおもひ起して、無量の思を述べた歌なのです。

別れ行く思の雲のたちそふや

今日もしぐるゝあづま路の空

やはり東卜りの道すがら詠んだ歌の一つで、丹女に對する綿々の情なのです。

「あづま路」は東路で、京都から陸奥に到る迄の道筋の稱です。こゝでは江戸に下る道筋のことです。

だん／＼と都を遠ざかるに随つて、私の思は一層深くなつて来る。それは丁度あの空合のやうに、今日も亦しと／＼と雨が降るがまあ、本當に淋しいことだ。——と云ふのであります。「しぐるゝ」の一語は、時雨と別れを惜んで人知れずこぼす涙との二つに懸つてゐます。

より／＼に都に歸る旅人の

數にもれなん身の行方かな

斯うして旅を續けてゐる間には、時々都へ歸る旅人にも出會ふが、自分だけはもう再び都に歸ることが出来ない。あんな人達の境涯に身を置くことは、もう絶対に望まれないが、本當に名残り惜しいことだ。——と云ふのです。

「數にもれなん」の「なん」は、物事を指し示す語で、第二類の天爾波の一です。

「秀富の母は即ち義士大高源吾忠雄の母なり。云々」

最後の一段は十内の一家が擧つて義擧に加つたことを叙して、全篇に千鈞の重みを添へてゐます。

大高源吾は義士の中でも最も好く知られた一人で、俳號を子葉と言ひ、文武兩道を兼ね備へた優雅な士です。其の復仇直後に讀んだ「山を抜く力も折れて松の雪」「日の恩やたちまち碎くあつ氷」などは、今尙人口に膾炙してゐます。

岡野金右衛門は九十郎といひ、包秀と稱しました。母は大高源吾の姉です。父も亦金右衛門といひ、淺野長矩に仕へて物頭並となり二百石を食みました。國難起るに及んで義擧に加はりましたが、幾何もなく病歿しました。包秀は父の志を遂げざるを悲しみ、父の通稱を襲ふて金右衛門と稱し、以て其の志を繼ぐの意を見はしました。善く十字槍を用ひ、又俳歌を能くしました。死を賜る時年二十四、

補充文には村上浪六氏の「四十七士」の中から「義士の討入」を擧げておきませう。

義士の討入

折しも天の賜もの、昨日より降り降りたる大雪のいつしか霽れて、仰げば極月十四日の月、皎々と高く空を照し、見渡せば滿地の積雪、皚々として一點の塵埃なく、しかも曉近き寒風に凍りてこれ幸に脛を没せず、踏むに音あれど、四方は寂寞たる今や無聲の乾坤、その眞白の中に物凄き一

女子用 第十課 小野寺十内の妻

闇の黑影、敵の大門を望んで肅々と押寄せぬ。

神ならぬ身、表と裏の兩門より二年越しの遺恨を含みし四十七人、今夜を必死のますらを我が寝首を襲ひ來るとも知らず、この大雪を風流の友として、忘年の茶の湯を催し、また來る春を契りながら、更は開け客は散じて、主従こゝに安けき夢の眞最中。この寂寞たる乾坤を破りし内藏助の一聲、「か、れ」の大喝もろとも二挺の竹梯子、はや門脇の長屋にかかると見るや、武者振ひして待ちかねし一番乗の大高源五、つゞいて片岡源五右衛門、猿の如く傳ひしは小野寺幸右衛門、武林唯七吉田澤右衛門、富森助右衛門、矢田五郎右衛門いづれも落ち來る雪を頭上に浴びて攀登れば、誰かは後るべき、我も〜と先を争ふ中に、「待たれよ老人」と呼ぶ聲を耳にもかけず、ことし八旬に垂んたる堀部彌兵衛、老の力足を踏み目を怒らしながら、皺枯れたる物凄き聲に、「えい〜」と叫んで乗越えぬ。

上より外の梯子を引揚げて、内へ掛け下す間もあらせず、氣早の面々、ひらり〜と身を躍らし、飛込めば、原惣右衛門、屋根に立ちながら天地に照添ふ月と雪とに邸内の棟を見渡して、「あれよそれよ」と顔に指圖せし脚下つるりと踏らし、どつと落ちしが一念の早業、むくりと跳ね起きて「か、れ〜」

物音に夢を破られし門番の足輕三人、寢惚眼に狼狽へ出るを、忽ち引つ捕へて高手・小手に縛め

ぬ。

内藏助は表の門を背にしつゝ、心に神明を拜し、眼を四方に配りながら、身動きもせざる雪中の二王立、兩脇には旨を承けて指圖役の原惣右衛門と間瀬久太夫。

いづれ劣らぬ一味の中にも、豫ての定め、屋内へ斬入るべき片岡以下の九人は、固より虎穴に飛込む勢、生きて再び屋外へ出でざる覺悟、月に閃く白刃を抜きつれ、槍の穂先を争うて、降りつもりし雪を白波の如く跳ねたてながら、霧地に玄關へ走せ向ひ、おの〜今を一期の大音聲に呼ばはりぬ。

「淺野内匠頭の舊臣ども、上野殿の御首級を申し受けに参つた。推參推參」と云ひも終らず玄關の戸を蹴破り打破り、わつと喚いてまづ先に躍り込みしは小野寺十内の養子幸右衛門、流石に敵も武士なり、心得たりと立出でしを、出合頭の矢聲もろとも、横薙ぎに高股を斬つて落して、其のまゝ奥へ行かんとすれば、廣間の床脇に立並べたる幾張の弓、ばら〜と一拂ひに弓弦を斷つて進みたる當意即妙、後々までも感稱の種となりぬ。

義士討入 その二

西の裏門は大石主税良金、その後見は吉田忠左衛門と小野寺十内の二人。これに従ふ面々は二十

女子用 第十課 小野寺十内の妻

一人。表門に時を合せ、氣を合せ、それといふや、一黨中に大力の杉野十平次と三村次郎左衛門、満身の勢猛く大槌を振うて續けざまに三四度、吼ゆるが如き聲もろとも打叩けば、扉は破れ門は折れて、どつと屋根より落來る雪崩を浴びながら、まつ黒に込入りぬ。東西兩門より、聲をあはせ力をあはせ勢をあはせて、今や室内に戦の圍なる時、大石主税、左右に向ひ會釋しながらの挨拶、「二老の御後見、もはやありがたく受けました。この上は初心者ながら主税これにまかり在る、屋外のすみずみその他の人しれぬ物陰に、いかやうの敵あらうも知れぬをりから、御苦勞ながら一わたり御見廻り下されたい」

「や、申されたぞ。さうなうて叶はぬ筈、天晴れ大夫の子息ぢや」と、吉田と小野寺の二人、おのおの左右に分れて立去りしが、果して人しれぬ物影より、隙を窺ひ味方の不意を覘はんとする敵五人の内、老いたれど早業の吉田忠左衛門に目早く認められ、その槍に縫はれしもの二人、また小野寺十内の槍に突伏せられて前後に斃れしもの三人。

十内、その槍の穂を雪中に突込み、血糊を拭ひながら見上ぐれば、隣家は土屋主税の屋敷、塀越しに固めし高張提燈を雪にてらして、もの／＼しき警固の體、隣家の情誼に吉良家へ助太刀するかと見れば見らるる有様に、折しも來合せし原惣右衛門と片岡源五右衛門もろとも、その塀際に近くより添ひ、おの／＼三人の名を名乗りながらの大音聲、「我々は播州赤穂淺野家の舊臣ども、亡主へ

の供物を頂戴いたさうとて、今夜これへの推參、他家様へ對して毛頭の慮外は仕らぬ。あはれ武門の御情、何卒々々このまゝ御見遁しを願ひたい。」

言葉は低く一應の禮儀を盡せど、もし塀を乗越えて敵に味方をすれば、まだ冷めぬ血刀と血槍の熱を浴びせて、片つ端より打取らんとすの勢、暫し其のまゝ見上げしが、高張も動かず人數の聲もせず、静まり返りて我が屋敷を打守る體。

この時は既に東西・表裏と屋内・屋外もはや出るほどの敵を斬靡けて、相手なき刀槍を提げながらこゝぞと思ふ奥深き一室へ踏込みしが、有明の殘燈、うす闇き下に、架けたる刀の金色のみ光を放ちて、枕も轉びしまゝの重ね夜具は蛻の殻、手を差込めば夢を破りし證跡、まだ微温あり。

それといふ言下に忽ち四方へ駈散りて、あらゆる室内の隅々まで捜し廻りしが、天を翔りしか、地を滑りしか、さらに影なく音もなく、いつしか東雲の横雲より白みかゝりて、夜は將に近く明けなす。

偕は今までの苦心も水の泡かと、一同少し弱れる折柄老功の奮勵、はつと一時に氣を取直して、又もや四方・八方へ手を分け足を飛ばせしが、臺所口に打續く長屋尻の間に一棟の物置小屋、外より鑰を懸けて人のあるべき筈なしと、今まで通りすがらに見遁せしも、尋ねあぐみし耳を欬て、忍び寄れば、何とやら幽かに物の動くけはひ。五六人その前に駈集りて戸を蹴破れば、奥より抛げ出

す炭俵、さてはと打拂ふ間もあらせず、飛來る一人を三村次郎衛門、矢聲もろとも袈裟がけに斬る。つゞいて飛出る者共を四方より斬斃せば、残る最後に絶體絶命の一人、小刀を抜いて現れし眞正面より、間十次郎の槍玉ぐさと刺せば、武林唯七また肩先の一刀、視れば一個の老體なり。白無垢の小袖を血に染めて、まだ死に切れぬ氣息奄奄。

「や、白無垢の小袖。」

「たゞものでないぞ。」

「聞き及ぶ年輩。」

「若しやそれでは。」

用意の小笛は音湧えて、曉の空に響き渡りぬ。いづれも我を忘れて駈來る一黨、前後・左右より立寄りて首筋を捉へ、その額を打守れども老の皺のみ、それかと思ふ創痕もなし。さらに引出して小袖を脱がすれば、あら嬉しや、紛ふ方なき先君が無念の御太刀筋、消えもやらず二年越し、ありありと残りぬ。

大願成就、今更胸に迫りて言葉も出でず。せきくる涙に兩眼を曇らせ、中には嬉しさの餘り大地に打伏し、聲をあげて雪中に號哭するものあり。

表の門脇に縛め置きし番人の足輕を連來りて、いよいよ其の人と定まるや、内藏助は靜かに進み

一刀すらりと引抜きぬ。

「淺野内匠頭の舊臣四十七人、吉良上野介殿、御首級を申し受ける。」

凛たる一言、まだ息絶えぬ上野介が咽喉元、ずばと止めの一刀刺貫き、其のま、振返りて、

「間十次郎首級を揚げい。」

それとも知らぬ槍先の功名、身に餘る面目、武士の冥加に叶ひし間十次郎、「御免なりました」と一黨に會釋しながら、打落せし首を改めて内藏助の實驗に備ふれば、取圍みし四十餘人の同志、思はず一聲に勝鬨を挙げぬ。

小野寺・片岡・原の三人、おの／＼また姓名を名乗りて屏越しの土屋家に挨拶、

「只今これに本望相達し、上野介殿御首級を申し受けて引取るところ、先刻より不慮の騒動を御耳に入れ、何とも恐れ入る次第、一同の者に代りて御挨拶を申し上げます。」

一黨さらに兩分して、その一半は邸内を押廻し、長屋長屋の戸を槍の鏝に叩きながら、「もはや引揚ぐるぞ。出合ふものは出合へ」との聲々、されど現在の主を打たれて首を縮むる腰拔ども、息を殺して空屋の如し。又一半は室内に入りて間毎々々に燃残る蠟燭を吹消し、爐にも火鉢にも悉く水を注ぎ入れ、もしや後に味方の取落せし見苦しき品やあるかと、いちいち見廻りぬ。

あけゆく空に響き渡る銅羅の音、一黨いづれも溢るるばかりの笑顔に駈集り、人數を改め姓名を

呼上げし後、かねての退口、整々として裏門より立出づれば、旭日東天に昇りて、満月の雪紅に匂ひぬ。

女子用 第十一課 西洋の家庭

舊讀本 卷の二に出てるた教材を其の儘をこゝに引直してあります。

此の教材の取扱は、どうしても先づ日本と西洋との家庭組織の相違を明にしなければなりません。一體家には二種あります。家族制度の家と個人制度の家とがそれです。家族制度の家は一家長の支配に属する同姓親族の一團で、個人制度の家は婚姻に因り一男一女の結合を以てなる一團であります。昔は社會の單位が個人にあらずして、家にありましたことは、歴史上東西其の揆を一にし、殆ど例外を見ません。家族制度の最も盛んであつた羅馬の古代に就いて之を見ますと、家族團體は之をファミリウスといひ、ファミリウス相集つてゲンスを成し、ゲンスが又相集つてキュリヤを成し、キュリヤが相集つて茲にトリベ即ち種族を成し、サビニ及びラチニの二種族が相集つて、以て羅馬の國家を成してゐました。而して家族團體の長即ち家長は、獨り家神を祭るの權を有し、家族は之に與かることを得ませんでした。

家長は又家族に絶対の命令權を有し、時としては生殺の權をも有してゐました。一家の財産は擧げて家長に屬し、家長獨り之を自由に收益處分することを得、家族の收得したる財産は當然家長の所有に歸してゐました。古代の獨逸法制に於ても、亦親族的團體の最小なるものをシツベといひ、以て政治組織の單位と成してゐました。シツベが相集つてフンデルトを成し、フンデルトが相集つてフォルク即ち國民團體を成してゐました。而してシツベの中にシヨッス即ち狹義の家族があつて、其の家長の權力は略々羅馬の家長に類似してゐました。我國に於ても、亦社會組織の單位は氏にして、氏は總べて氏上たる族長の權下に結合し、族長は其の氏に屬する氏人を率ゐて、公私の事に従ひ、其の氏人に對しては恰も君主の如き權力を有してゐましたのは人の知る所であります。家族制度の家は前述の如く、家長に強大の權力を認め、家族は其の保護監督の下に生存してゐますから、社會の基礎を鞏固にし、親族間の關係を純潔にするなどの利益がありますが、同時に家族は殆ど家長の附屬物であつて人格を有せず、權利義務の主體たるを得なかつたのですから、個人の發達を害し、國家の富強を妨ぐるの弊があります。歐羅巴に於ては、キリスト教の普及、純正哲學の進歩、經濟事情の變化によつて、家族制度は夙に廢滅に歸し、今日に於ては何れの國も個人制とな

つてゐます。個人制の家は、單に自然の必要に基く男女の結合であるばかりでなく、各人皆獨立の人格を有し、各々社會の一單位をなし、主従尊卑の觀念がありません。唯々自然の必要上、妻に對して夫權を認め、子に對して親權を認めるばかりです。

我國今日の家は、西洋の權利思想の影響と、我國數百年來の慣習との間にありまして、主義として家族制度を採用してゐますが、併し古のやうに強大な家長權を認めてゐません。即ち我國今日の家では、戸主及び家族より成り、一家の長として其の家を統轄する者を戸主といひ、戸主の親族にして其の家に在る者を家族と稱してゐます。而して戸主の一身に專屬するもの、及び戸主の有する權利義務の全體を總括して、之を家督と稱し、家は此の家督の相續によつて繼承されます。併し戸主はたゞ其の家の構成に關する事項、及び家族扶養の關係に於て、特別の權利義務を有するばかりです。

次に家族制度の家には、本家・分家・同家の區別を生じます。本家とは自家の祖先が家族となつてゐた家をいひ、分家とは其の祖先が嘗つて自家の家族であつたものをいひ、同家とは其の祖先と自家の祖先とが何れも同一の家族であつたものを意味してゐます。

一國の法制に於て、家族制度を採るべきか、將又個人制度に依るべきかは、議論のみを以

て律する譯に行きません。これは一國の歴史・習慣と密接な關係を有する重大な社會問題でありまして、法律のみを以て解決すべきものではありません。宗教道徳と相俟ち相助けて之を決しなければなりません。之を西洋諸國の歴史に見ましても、家族制度廢滅の原因として見るべきものは二三にして止りません。曰くキリスト教の傳播、曰く中央集權の發達、曰く商工業の發展、曰く十八世紀哲學の影響等は皆それです。キリスト教に於ける唯一神崇拜の觀念は、家族制度の基本となつてゐる祖先崇拜の念を歐羅巴の天地から驅逐しました。中央集權の發達は、國家内に於ける小權力團體、又は小國の存在と相容るゝことが出来ません。更に又十字軍以後、先づ地中海沿岸に勃興した商工業は、個人の才幹技能を尊重せしめ、自由競争階級打破の風調を促しました。且つ個人主義に基ける十八世紀及び十九世紀前半の哲學は、諸學の上に於ける自然法理論と相結んで、愈々個人の自覺を深からしめ、益々個人の價值を認識せしめました。斯うして家族制度は終に歐洲の天地を去つたのであります。併し思想の潮流と時代の趨勢は、恰も波浪の岸を洗ふが如く一去一來して、極端に奔りたる個人主義の後を承けて、十九世紀後半及び二十世紀の歐羅巴には、社會主義の反動と看做すべきものが少くありません。家産の制度が學者の唱ふる所となつたばかりでなく、近くは千九百七

年十二月のスイス民法に於て採用されたのは、其の反動の頗る有力であることを證明したものと云へませう。

東西兩洋の國民性の相異は、直接それが衣食住の上にも著しい相違を見せてゐます。特に我が日本の家庭は世界の何れにも類を見ない特異の美點を有してゐます。之を單に衣食住の方面から眺めただけでも、日本の事情に通じない西洋人には、見るもの聞くもの悉くが驚異であり、不可思議であるに違ひありません。野口米次郎氏の「神秘の日本」の中に、日本趣味の特色を説いた一節に、

外人が私の所へ来て何か日本獨特のものが見たいといふ時、私はいつも茶席へ案内する。私は彼を飛び石で路が附いてゐる所謂露路に立たせる。そして「ここは外面的世界を捨てて自己遍照に入る通路だ」と説明する。私は彼に茶席を取巻く小さい庭を眺めさせ、幾百年の星霜を経て灰色になつてゐる老樹を指さしていふであらう、「君はここに沈黙の祝福がある事を感じねばならない。私共東洋人はすべての詩の最高潮を寂寞のなかに發見するのだ。寂寞の幽かな光に導かれて審美の恍惚に入るのだ。君はそれを理想の聖殿といつても、また唯美の悅樂境といつてもいい。その名前は どうでもいい……ここは孤獨に生きる無過の住む所だ、眞實の個人主義を發見して、そして宇宙の靈に

合する所だ」それから私は私が伴つて来た外人に、古びた花崗岩の燈籠が聖人か哲人か詩人でもあるやうに蹲つてゐるその姿に注意させるであらう、「この燈籠の心の中には眞理を照らす所謂燈臺の光がある。この光は人にどうして社會の狂瀾怒濤を忘れるかを教へるであらう、またどうして人生の廢墟と塵埃を脱するかを教へるであらう。どうして私共が清澄な默禱の雰圍氣を作るかを教へるであらう、又どうして茶道に入るかを教へるであらう」私は彼に、茶席の床が地面に接近して低く作られてゐて、私共が自然を足下から眺めて敬禮することが出来るやうになつて居ると語り、茶席の底が低く作られてゐて、「この小暗い空氣は思想や想像を一點に集中させるに便ならしめる」といふであらう。

それから私は彼を茶席内に入らせ、氣味の悪い位つめたい疊の上に坐らせ、そして眼を閉ぢて默想せよと彼に強ひる。彼は私のいふが儘にする。私は彼に、「どうだね、默想の神祕は君に淨滌界を與へたか。君の靈は無礙自在を得たか。私共がここで創造しようとする甘やかな靜かな恍惚境に對して君は何と思ふか」といつてみると、彼は漠然と微笑を洩すのみで一言も發することが出来ないであらう。成程東洋、否、日本の審美觀を理解することが出来る感情の所有者でない限りは、大概の外國人は私の言葉を了解することが出来まい。了解することが出来ないのも無理はないと私は思ふ。なぜならば、この茶席即ち茶道で暗示される日本の審美主義は、日本の古文化が極點まで發

達したもので、自然と人生を融和させてそれを單純化させた日本人の態度は、彼等外國人がこれまで夢にも見なかつた所のものであらう。然し人が私に日本で一番特色あるものは何であるかと尋ねたならば、私は直に茶席を擧げる、否、茶席を背景として日本人の審美的態度そのものを擧げるであらう。

私はここで私が嘗て書物で讀んだことがある一つの物語を話したい。將軍秀次公が朝の茶に三四人の茶人を招いたことがあつた。招かれた茶人は當時の名家共であつたことはいふまでもない。季節は四月、日は二十日、櫻もまだ散るか散らないといふ頃で陽春気分も段々老いて來る時分であつた。朝の催しであつたから、薄暗い東風は茶席の軒端の露を拂つて、庭の樹木には朝の光線を恐れる夜の靈が蹲つてゐたといふことが出來た。茶席の中には燈火もともされず靜寂がその全部を占領してゐた。耳をそばだてると茶釜から銀鈴のやうな響が來る、それは湯のたぎる音で、この物古い音律だけが茶席の寂寞を破る特權を持つてゐると思はれた。招かれた客人はだれも無言で、主人役の關白秀次公のお出ましを今や遅しと待つてゐた。所が主人公はなかなか出て來られず、客人共は欠伸をかみしめ乍ら頭をあげると、何の豫告もなく突如と有明の月がすつと忍び込んで來た、その微かに冴えた曙近き月の影が落ちて行く所を見送ると、床の間に懸けてある小さな色紙の上に落ちてばつたり留つた。その色紙には定家の能筆で、「ほととぎす啼きつるかたを眺むればただ有明の月

ぞ残れる」の歌が書いてあつた。招かれた茶人共はハタと膝を打つて、「ははあ、この茶庭はこの色紙を見せるためだ。有明をあてこんで「ただ有明の月ぞ残れる」の歌の色紙とは、將軍の御趣味のほど感嘆の至りである」と心の中で叫んだ。話はこれだけで、其後主人役の將軍はどう御出席になつたか、どうこの茶會が終つたかは分らないが、そんなことはどうでもいい。話の要點は關白秀次の唯美的な態度に懸つてゐる。實に彼の態度は精細な詩の祕術に觸れたものである。この特殊な審美的雰囲気誘致し得た藝術的態度は驚嘆に價する。洗練し盡された文化の醇母から産れた詩的行爲とはこのことであらう。私は他の何處にも詩歌繪畫の藝術品を紹介する方法として、これ以上に優美なものがあらうとは思はない。又繪畫詩歌を鑑賞する方法として、偶然に招かれた茶人共が發見するに至つた状態以上に幽雅なものがあらうとは思はない。私はこれこそ諸外國に誇ることが出來ると信ずる。西洋は質より量に走る、又複雑の果は混亂に落ちる國である。西洋は如何に自然を調節配列するかを知らない國である。西洋は如何に人生を整理するかを知らない國である。日本は西洋に如何に自然と人生を選択し單純化するかを教へねばならない。茶席生活を重要視した昔の文化は沈黙と孤獨の徳を教へた。量よりも質を重大視して小の中に大を發見する方法を教へた。あらゆる人生の完成は自己整理から始らねばならないと教へた。そして茶席こそ、それが具體化したものに外ならない。故に私は外人を茶席に案内して日本が創造した文化の一大アスペクトであると

説くのである。

私は茶席の作法をつひぞ學んだことが無いものである。私が外人を其處へ案内するとしても、私は決して細い作法を説く資格を持つものではない。然し私は茶席の藝術が放散する雰圍氣に觸れて人生の外面的世界から解脱して無礙自在な永劫を掴むことが出来るやうな氣がする。言ひ換へると私も生死一如の境地が茶席で發見せられるやうな氣がする。この境地は西洋人でも進んだ詩の理解がある人であるならば、入る事が出来る境地であると思ふ。茶席は日本特殊の創造であるけれども確に世界的價值がある。よしんば今日の西洋が日本の茶席藝術を理解しないとしても、明日の西洋人の理解がそこへ及ばないとは限らない。私は茶席藝術を高唱して日本の審美を説くものである。

と云ふのがありますが、東西兩洋の國民性の相違を比較し得て頗る妙であります。

此の教材も斯うした見地から大きな背景を裏附けて見ましたら、文の内容も一段と趣を添へて來ませう。

文は五段に分れ、第一段は西洋の客間、第二段は西洋人の家庭生活、第三段は西洋の主婦、第四段は西洋婦人の嗜み、第五段は主婦の仕事となつてゐます。

「西洋の客間の様を見ると、壁に掲げた油繪、机の上の花瓶、云々」

冒頭の一段は西洋の客間の様を述べ、之を日本の座敷と對照してゐます。前半には西洋の客間の様子を見ると、丁度小博物館でも見るやうに、いろんな物がごちゃ／＼と並べ立てられてゐると云ふことを述べ、後半には日本の座敷が清楚で如何にもさつぱりしてゐると云ふことを叙して、兩者を比較對照し、其の趣が如何に異つてゐるかを想像させてゐます。西洋の客間に對しては「恰も小博物館の觀を呈してゐる」と言ひ、日本の座敷に對しては「清楚にして趣が深い」と云つたあたり、彼我國民性の相違を想像させて餘りあるものと云へませう。

「西洋では、客間と食堂と寢室が、皆別々になつてゐるのが普通である。云々」

此の段には西洋人の家庭生活の一般を叙してゐます。先づ客間と食堂と寢室とが皆別々になつてゐることを述べ、次で食事の有様に移り、朝・晝・晩と夫々我國の有様と異つてゐる所を叙して、最後に我國の孤獨的なのに對して、彼の國が如何にも解放的であることを叙してゐます。こゝらにも彼我國風の相違が想像されて、何とも言へない味ひがあります。

「食卓の世話の主婦たる人の役目、肉を切つて盛分け、云々」

後半の三段四段五段は、西洋の家庭に於ける婦人の有様を叙してゐます。此の段は西洋の

主婦、次の段は西洋婦人の嗜み、最後の一段は主婦の仕事となつてゐます。西洋の婦人が無駄のない生活をしてゐることや、如何にものびのびとした生活をしてゐるところなどは、日本婦人の學ばなければならぬところで、各段それごとく彼の國の長所を挙げると共に、我が國風の缺陷を反省させたあたりは何とも言へません。こゝら一端を讀者の想像に任せた所謂餘情法で、言外に含まれた教訓は更に一段の深刻味を帯びてゐます。

女子用 第十四課 甲 冑堂

教材の出所は橋南谿の「東遊記」で、前半は原文其の儘を引用し、後半は原文の筋を取入れて巧みに教材化してあります。

参考のため先づ其の原文を擧げて置ませう。

甲 冑堂

奥州白石の城下より壹里半南に、才川といふ驛あり。此才川の町末に、高福寺といふ寺あり。奥州筋近年の凶作に、此寺も大破に及び、住持となりても食物乏しければ、僧も不住、明き寺となり、本尊だに何方へ取納しにや、寺には見え、庭は草深く、誠に狐鼻のすみかといふも餘あり。此寺中に又一ツの小堂あり、俗に甲冑堂といふ。堂の書附には故將堂とあり。大き織に二間四方許の小堂なり。本尊だに右の如くなれば、此小堂の破損はいふまでもなし。やう／＼に縁にあがり見るに、内に佛とても無く、唯婦人の甲冑して長刀を持たる木像二ツを安置せり。いかなる人の像にやと尋るに、佐藤次信忠信二人の妻なりとかや。其昔、義經、鎌倉殿の義兵をあげ給ふを聞、秀衡にいとま乞して鎌倉へ赴き給ふ時、佐藤庄司、我子の次信忠信を御供に出せり。其後義經京都へ攻登り。平家を追落し、一の谷八島などにてさばかりの大功をたて給ひて、再度奥州へ來り給ひし時、はじめつき従ひて出たりし龜井片岡など皆無事にて歸國せしに、次信は八島にて能登殿の矢先にかゝり忠信は京都にて義の爲に命をおとし、兄弟二人とも他國の土となりて、形見のみかへりしを、母なる人かなしみ歎きて、無事に歸り來る人を見るにつけて、せめては一人なりとも此人々のごとく歸りなばなと泣沈みぬるを、兄弟の妻女其心根を推量し、我が夫の甲冑を著し、長刀を脇ばさみ、い

さまじげに出立、唯今兄弟凱陣せしと、其佛を學び老母に見せ、其心をなぐさめしとぞ。其頃の人も、二人の婦人の孝心あはれに思ひしにや、其姿を木像に刻みて残し置しとなり。嗚呼兄弟の人は古今ためしすくなき忠義武勇の士なり。其人につれそひし婦人又希代の孝女にて、夫婦忠孝の勝れしも世に珍らしき事なり。余此物語を聞、此像を拜するに、そゞろに落涙せり。かくばかり人の鑑ともなるべき孝婦の像の、かくあはれてたる小堂の雨風をだに防ぎかねて、彩色も落失せ、僧だに守らで、香花を供する人も無く、年月に荒れ行き、つひには跡かたもなくなりはて、是等の事をも語り傳ふる人もなくならんを、誰ありてあはれといひて、一錢の參物をだに供する人も無きは、世には忠孝に感ずる人のすくなきにや。あまりにあはれに覺えしかば、委敷書附歸れり。

南谿姓は橘、名は春暉、別に梅華仙史の號があります。京都の人で醫を業とし、傍ら文學に通じ、音律を明にしてゐました。漫遊は特に其の好むところで、天明二年の秋から翌三年の秋にかけて、山陽を経て九州及び四國をめぐり、四年の秋から六年の夏にわたつては、東海・東山・北陸の諸州に遊びました。其の間に見聞した奇事異聞を録したものが即ち東西遊記正續篇であります。文章平淡にして技巧を弄せず、讀去り讀來る間に言ふに言へない妙味を覺えます。此の教材は其の東遊記の一節で、原文も矢張り甲冑堂と題し、卷の一の奥州紀行

の中にあります。

『奥州白石の城下より一里半南に、犀川と云ふ驛あり。云々』

冒頭の一段は東遊記の原文を引用した形になつてゐます。無論そこゝ可なり修正を加へてありますが、併し大體に於て原文其の儘と看做しても差支へはありません。参考のため、こゝに引用されてゐる部分を挙げますと、

『奥州白石の城下より一里半南に、犀川といふ驛あり。此犀川の町末に、高福寺といふ寺あり。奥州筋近年の凶作に、此寺も大破に及び、住持となりても食物乏しければ、僧も不住、明き寺となり、本尊だに何方へ取納しにや、寺には見えす。庭は草深く、誠に狐・梟のみかといふも餘あり。此寺中に又一ツの小堂あり、俗に甲冑堂といふ。堂の書附には故將堂とあり。大き纒に二間四方許の小堂なり。本尊だに右の如くなれば、此小堂の破損はいふまでもなし。やうく縁にಾಗಿ見るに、内に佛とても無く、唯婦人の甲冑して長刀を持たる木像二ツを安置せり、いかなる人の像にやと尋るに、佐藤次信・忠信二人の妻なりとかや。』

とあります。この段は全篇に對して序説の形で、先づ其の堂の荒れ果てた有様を叙し、次で其の堂がどんな由緒を持つてゐるかを簡単に書添へてゐます。斯うして次の段から、其の堂の由緒やそれに對する感想を叙しようとするのであります。

佐藤繼信は三郎と稱す。陸奥の人なり。父元治信夫の莊司たり、湯莊司とも稱す。母は藤原清衡の季子、互理十郎清綱の女、繼信弟忠信鎌田盛政鎌田光政と俱に義經に仕へて四天王と稱す。義經の奏請を以て兵衛尉となる。屋島の役に平教經勁弓矢を以て頻に義經を伺ふ。麾下の勇士馬前に翼蔽す。教經射て十騎許を斃す。繼信光政も亦其の矢に中る。教經の僮菊王進みて將に繼信の首を斬らんとす。忠信射て之を瘡し、繼信を扶負ひて歸る。義經營に莅みて首を膝に加へて曰く、汝言はんと欲する所あるか。繼信曰く、臣陸奥を出でしより身を公に委ね、今日公に代りて命を殞し名を後世に傳ふ、亦榮ならずや、第々公の平氏を殄滅するを見ざるを憾む。と言畢りて絶す。時に年二十八、義經悲歎し僧をして繼信光政を牟禮の林中に葬らしめ、愛する所の名馬を飾りて、以て賻と爲す。軍中感悅す。(大日本史)

佐藤忠信は陸奥の人にして、父を元治と曰ふ。繼信の弟なり。義經に事へて四天王の一に

稱せらる。義經の奏請を以て兵衛尉となる。毎に軍に従つて功あり。文治元年昌俊の義經を襲ふや、忠信等力戦して之を破る。義經京師を去りて吉野の山に匿くる。山僧横川覺範等相謀りて之を攻む。義經窘迫して將に自殺せんとす。忠信曰く、壇浦の役家兄繼信公に代りて死を致す。今日臣も亦た公の名を稱して以て戦死せん。公宜しく間に乗じて去るべしと、義經許さず。忠信苦請す。乃ち著る所の甲を解きて之に與へ、且つ甲士十七を分ちて之れに屬せしめ、自ら十餘人を率ゐて潜に逃れ去る。忠信伴りて源判官と稱し、從士と俱に矢を放ちて之を拒ぎ、終に覺範を殺す。殺傷頗る多し。僧徒驚歎して曰く、判官の劍術は嘗て之を聞く、料らざりき射を善くする此の如くならんとはと、敢て近づく者なし。既にして矢竭く、刀を揮つて奮戦す。從士皆死す。是に於て忠信大に呼びて曰く、汝等我を以て判官と爲すか判官去ること已に遠し、我は之れ佐藤忠信なり。請ふ勇者の死を視よと、乃ち伴りて自殺する爲ねして谷を越えて逃れ去る。明年京師四條室町に居り、竊に書を私する所の女に贈る。其の夫之を白す。九月糟谷有季兵を以て之を圍む。忠信從士二人と突出して力闘す。終に自殺す。年二十六。一に曰く、其の死は同年正月六日に在りと。(大日本史)

「繼信忠信は源義經の家來なり、平家の盛なりし頃、義經は奥州に下りて云々」

前段を受けて此の段は其の由來です。繼信忠信の兄弟が、義経に隨從してからそれ〴〵討死するまでの成行を叙し、故郷に待つてゐた母の悲歎から、それを慰めた二人の嫁の悲壯な行爲に及ぼしてゐます。我が子二人はそれ〴〵君の身代りとなつて、花々しい最期を遂げ、まだうら若い二人の嫁は夫の母に仕へて、淋しく孤閨を守つてゐる。さうした境涯に身を置いた母親の氣持や、それを勞はりかしく嫁二人の衷情が此の文の山で、其の悲痛悲壯な場面は一讀何人も思はずほろりとさせられませう。こゝら名高い謠曲「攝待」の種本で、あの悲痛な場面はこゝらの史實を戯曲化したものなのです。

繼信が屋島の合戦で、能登守教経の矢に中つて討死した壯烈な場面は、平家物語の卷十一「繼信最期の事」に詳しく出てゐます。

嗣信最期の事

中にも後藤兵衛實基は、古兵にてありければ、磯の軍をばせず、先づ内裏へ亂れ入り、手々に火を放つて、片時の煙と燒き拂ふ。大臣殿、侍どもに、「源氏が勢は如何程あるぞ」と問ひ給へば、「七八十騎にはよも過ぎ候はじ」。あな心憂や、髮の筋を一筋づゝ分けて取るとも、この勢には足るま

じかりつるものを、中にも取り籠めて討たずして、あわて、船に乗つて内裏を燒かせぬることこそ口惜しけれ、「能登はおはせぬか、陸に上つて一軍し給へかし」と宣へば、「承り候ふ」とて、越中次郎兵衛盛績を先として都合五百餘人、小船に乗り、燒き拂ひたる總門の前の汀に押し寄せて、陣を取る。判官も八十餘騎、矢比に寄せて控へたり。平家の方より、越中次郎兵衛、船の屋形に進み出で、大音聲をあげて、「抑以前名乗り給ひつるとは聞きつれども、海上遙に隔たつて、その假名實名分明ならず。今日の源氏の大將軍は誰人にてましますぞ。名乗り給へ」といひければ、伊勢三郎進み出で、「あな事もおろかや、清和天皇十代の後胤鎌倉殿の御弟、大夫判官殿ぞかし。」盛績聞いて「さることあり、去んぬる平治の合戦に父討たれて孤にてありしが鞍馬のちごして、後には金商人の所従となり、糧料背負ひて、奥の方へ落ち下りしその小冠者めがことか」とぞいひける。義盛歩ませ寄つて、舌の柔なるまゝに、「君の御事な申しぞ。さいふわ人どもこそ、北國砥並山の軍に打ち負け、辛き命生きつゝ、北陸道にさまよひ、乞食して上りたりしその人か」とぞいひける。盛績重ねて、「君の御恩に飽き充ちて何の不足あつてか乞食をばすべき。さいふわ人どもこそ、伊勢國鈴鹿山にて山だちし、妻子をもはぐみ、わが身も所従も過ぎけるとは聞きしか」といひければ、金子十郎、進み出で、「詮なき殿原の雑言かな。われも人も、そら言ひつけ雑言せんに、誰かは劣るべき。去年の春、攝津國一ノ谷にて、武藏相模の若殿原の手なみのほどをば見てんものを」といふ

所に、弟の與一、側にありけるが、いはせも果てず、十二束三伏取つてつがひ、能つ引いてひやうど放つ。次郎兵衛の鎧の胸板に、うらかく程にぞ立つたりける。さてこそ互の詞戦は止みにけれ。能登殿、船軍はやうあるものぞとて、鎧直垂をば著給はず、唐巻染の小袖に、唐綾威の鎧著て、いかものづくりの太刀を佩き、二十四差いたるたかうすべうの矢負ひ、滋籐の弓を持ち給へり。王城一の強弓精兵なりければ、能登殿の矢先にまはる者、一人も射落されずといふことなし。中にも源氏の大將軍九郎義經を只一矢に射落さんとねらはれけれども、源氏の方にも心得て、伊勢三郎義盛奥州佐藤三郎兵衛嗣信、同じく四郎兵衛忠信、江田源三、熊井太郎、武藏坊辨慶などいふ一人當千の兵ども、馬の頭を一面に立て並べて、大將軍の矢表に馳せ塞りければ、能登殿も力及び給はず、能登殿、「そこのき候へ、矢面の雜人原」とて、さしつめ引きつめ散々に射給へば、矢庭に鎧武者十騎ばかり射落さる。中にも眞先に進んだる奥州佐藤三郎兵衛嗣信は、弓手の肩より馬手の脇へつと射抜かれて、しばしもたまらず、馬より倒にどうと落つ。能登殿の童に、菊玉丸といふ大力の剛の者崩黄威の腹巻に三枚甲の緒をしめ、打物の鞘をばづして嗣信が首を取らんと、飛んでかゝるを、忠信、側にありけるが、兄が首を取らせじと、能つ引いてひつうと放つ。菊玉丸が草摺のはづれを、あなたへつと射ぬかれて、いぬみに倒れぬ。能登殿、これを見給ひて、左の手には弓を持ちながら右の手にて菊玉丸をつかんで、船へからりと投げ入れ給ふ、敵に首は取られねど、痛手なれば死に

にけり。この童と申すは、元は越前三位通盛卿の童なり。然るを三位討たれ給ひて後、弟能登殿にぞ使はれける。生年十八歳とぞ聞えし。能登殿、この童を討たせて餘にあはれに思はれければ、その後は軍をもし給はず。判官は、嗣信を陣の後へかき入れさせ、急ぎ馬より飛んで下り、手を取つて、「如何覺ゆる三郎兵衛」と宣へば、「今はかうにこそ候へ。」「この世に思ひ置くことはなきか」と宣へば、「別に何事をか思ひ置き候ふべき。さは候へども、君の御代に渡らせ給ふを見參らせずして死に候ふこと心にかゝり候へ。さ候はでは、弓矢取は敵の矢に當つて死ぬること、もとより期する所にこそ候へ。就中原平の御合戦に、奥州佐藤三郎兵衛嗣信といひけん者、讃岐國屋島の磯にて主の御命に代つて討たれたりなど、末代までの物語に申さんこそ、今生の面目冥土の思出にて候へ」とて、只弱りにぞ弱りける。判官は猛き武士なれども餘にあはれに思ひ給ひて、鎧の袖を顔に押しあて、さめくんとぞ泣かれける。若しこの邊に尊き僧やあるとて、尋ね出させ、手負の只今死に候ふに、一日經書いて弔ひ給へとて、黒き馬の太くたくましきに、よい鞍置いて、かの僧にぞ賜ひにける。この馬は、判官五位尉になられし時、これをも五位になして大夫黒と呼ばれし馬なり。一ノ谷の後鴨越をもこの馬にてぞ落されける。弟忠信を始めとして、これを見る侍ども、皆涙を流して、「この君の御爲に命を失はんことは、全く露塵程も惜しからず」とぞ申しける。

尙忠信の吉野落は「義經記」にも詳しく出てゐますが、こゝでは目先を變へて謠曲「忠信」を擧げておきませう。

忠 信

シテ 佐藤忠信
ツレ 源義經
ワキ 伊勢三郎
ツレ 從者

ワキ詞「是は判官殿の御内に、伊勢の三郎義盛にて候。さても我が君判官殿は、この吉野を頼み御座候處に、衆徒の詮議變り、今夜夜討すべき事一定のやうに申し候間、この事申し上げばやと存じ候。如何に申し上げ候、義盛が参りて候。判官詞「此方へ來り候へ。ワキ詞「畏つて候。判官詞「さて只今は何のために來りて有るぞ。ワキ詞「さん候只今参る事餘の義にあらず。當山の者ども心變りし、今夜夜討を仕るべき事一定のやうに申し候間、この事申し上げべき爲に参りて候。判官詞「是は眞にて有るか。ワキ詞「さん候。判官詞「口惜しや我幾ばくの難を逃れ、命を重んずる事も、朝敵の虚名を晴らさんそのためなり。それに當山の衆徒夜討すべきを告げ知らする條、是偏へに天の御加護なり。とにかくに我は夜に入りこの所を開くべし。誰か一人留り防矢を射、その後命を全うして、路次にて追つ付くべき者やある。義盛計らひ候へ。ワキ詞「御説畏つて承り候さりな

がら、某を始め皆いづくまでも御供とこそ存じ候べけれ。恐れながら誰にても召し出だされて、直に仰せ付けられよかしと存じ候。判官詞「それこそ我等が思ふ所なれ。さらば佐藤忠信を此方へと申し候へ。ワキ詞「畏つて候。如何にこの屋の内に忠信の渡り候か。シテ詞「誰にて渡り候ぞ。ワキ詞「君よりの御使に義盛が参りて候。少し御用の事候へば、御参りあれとの御事にて候。シテ詞「畏つて候。ワキ詞「忠信参りて候。判官詞「いかに忠信、當山の者ども心變りし、今夜夜討すべき事一定のやうに申し候。とにかくに我は夜に入りこの所を開くべし。汝一人留り防矢を射、その後命を全うして、路次にてやがて追つ付き候へ。シテ詞「御説畏つて承り候ふさりながら、某が事は何處までも御供に召し俱せられ候ひて、餘人に仰せ付けられ候へ、若し辭し申す者あらば、この時御意をば背き申すまじく候。判官詞「いや汝を頼む上は、とかくの事はあるまじく候。シテ詞「御意をばいかで背くべき。しかも一人選まれ申し、防矢仕れとの御説、弓矢取つての面目なれば、忝うこそ候へとよきながら、我が君を始め奉り、謠「皆人々に御名残こそ惜しう候へ。地謠「不覺の涙を抑へて、御前を立つ。皆哀にぞ覺ゆる。かくては時刻移るとて、かくては時刻移るとて、我が君を始め奉り、門前を出でて間道より、ひそかに忍び出で給へば、シテ謠「忠信暫しは御供し、地謠「御暇申し留れば、かまへて命を全うして、御供に参らずは、不忠なるべし心得よと、涙を流させ給へば、忝しと忠信は、只ひとり留る心の、便も涙なるらん。便も涙なるらん。(中入)

立衆一聲詭「吉野川、水のまに／＼騒ぎ來て、波打ち寄する嵐かな。法師武者詞」いかにこの坊中へ案内申し候。シテ詞「今は夜更け人静まるに、案内申さんとは如何なる者ぞ。法師詞」わりなく頼朝よりの仰せに隨ひ、當山の者ども判官殿の御迎へに参りたり。とう／＼出でさせ給ふべし。シテ詞「あらはか／＼しや忝くも我が君に思ひかゝらんとや。よし先づ軍のこゝろみに、この矢一筋受けて見よと、地詭「高檜に走り上り、高檜に走り上り、中差取つて打ち番ひ、よつ引いて放つ矢に眞先かけたる武者數多、一矢にどうと轉べば、目を驚かし肝を消して、一度にどつとぞ譽めたりける。刀を抜き持ちて、刀を抜き持ちて、弓手の脇より馬手の脇へ、一文字に切るとぞ見えしが、空腹切つて櫓より、後の谷にぞ轉び落つ。敵の兵これを見て、寄れや者共首を取れと、一度にばつと寄り、打ち破り亂れ入り、をめき叫んで震動すれば、シテ詭「その隙に忠信は、地詭「その隙に忠信は、かたて用意の小太刀おつ取り、ひそかに忍び出で、茨からたち、分けつ潜りつ墓ひ行くを、怪しむる者有りて、あれは如何にと呼ばはりかくれば、地に伏し隠れ、聞きを便に忍ばんとするを遁すまじとて、走りかゝつて拂ふと見えしが、眞向破られて二つになれば、つゞく兵大太刀かざし打つ太刀を受け流し、諸膝かけて切り放し通つて、今はかうよと遙かの谷を、蝶鳥の如くに飛び翔り、蝶鳥の如く飛び翔つて、都をさしてぞ急ぎける。

龜井片岡はどちらも義經の侍臣で龜井片岡伊勢駿河と並稱せられ、常に義經の左右にあつて影の形に従ふ如く、最期まで隨從した人です。

「繼信の主と頼みし義經に忠ならしは、屋島の戦に教經の矢面に立ちて、主の命に代りしにても知るべし、云々」

此の段は筆者の感想で、兄繼信は屋島で瘞れ、弟忠信は吉野に踏止つて君の身代となつた忠勇義烈の行爲を賞揚すると共に、二人の嫁が能く母に仕へ、夫に代つて盡した貞烈悲壯な行爲を讃歎してゐます。彼は君の爲、これは夫の爲母の爲、一は雄々しく、一は健氣に、打揃つて忠孝の範を後世に残したと云つたあたり、所謂甲冑堂の由來で、冒頭の一段と首尾相應じて、文に一段の嚴肅味を添へてゐます。

軍めく二人の嫁や花あやめ

卯の花やをどしけゆゝし女武者

前の句は桃隣の句、後の句は小華山人の句です。どちらも堂に安置された木像に就いて詠んだ句で、甲冑して長刀を持つてゐる有様を詠じたものです。

補充文には此の課と最も關係の深い謠曲「攝待」を擧げておきませう。

攝待

シテ 繼信の母 子方 繼信の子鶴若 トモ 從者

ツレ 義經外同行山伏 ワキ 辨慶

ワキ、山伏一同次第詠「旅の衣は篠懸の、旅の衣は篠懸の、露けき袖やしをるらん。上歌子に臥し寅に起き馴れて、子に臥し寅に起き馴れて、長居の月を峯の雪、その松島に參らんと、東路さして急ぎけり。東路さして急ぎけり。」

ワキ詞「如何に申し候。まづこの所に御休みあらうずるにて候。兼房詞「承り候。や、是に高札の立ちて候。御覽候へ。ワキ詞「なに／＼佐藤の館に於て、山伏攝待と候。やがて御著き候へ。兼房詞「佐藤の館に於て、山伏攝待の事は我等が望む所なれども、佐藤の館が彈りに候程に、御通りあれかしと存じ候。ワキ詞「是は仰せにて候へども、只知らぬやうにて御著きあらうずるにて候。」

子詞「如何に誰かある。從者詞「御前に候。子詞「山伏達は幾人御著きあるぞ。從者詞「十二人御著きにて候。子詞「まづ／＼出でて對面申し候べし。」

ワキ詞「是なる幼き人は誰が御息にて渡り候ぞ。子詞「是は佐藤繼信が子にて候。ワキ詞「さて繼信殿は御内に御座候か。子詞「判官殿の御供申し、八島の合戦に討たれて候。ワキ詞「さてこ

の攝待は如何なる人の御企にて候ぞ。子詞「判官殿十二人の山伏となり、奥へ御下りの由うけたまはり候ほどに、祖母にて候ものこの程攝待を始めて候、見申せば方々こそ十二人御入り候へ、もし判官殿にては御座なく候か。ワキ詞「暫く候。かゝる卒忽なることを承り候ものかな、まづ／＼御内へ御入り候へ。さればこそ御大事にて候。おそれながら御座を替へられ、皆々の中のうちまじり御座候へかしと存じ候。判官「實にこれは尤にて候。」

シテ詞「如何に鶴若。子詞「何事にて候ぞ。シテ詞「山伏達は幾人御著き有るぞ。子詞「十二人御著き候。シテ詞「かしまし／＼、一聲詠「舊里を出でし鶴の子の、松に歸らぬ寂しきよ。シテ詠「實にや彈りある身として、御前に參りてさむらへば、かつうは亡き人の名をも朽たし、又は子供のいにしへの、恥をも顯すにてはさむらへども、餘りに御なつかしき心ばかりにて、御前に參りて候なり。是は故佐藤庄司が後家、繼信忠信が母にて候。實にや親子恩愛の別の餘りには、包むべき人目をも知らず、又は憂き身の恥をも、顯すにては候へども去りながら、この攝待と申すに、現世の新のためにも非ず、後生善所とも思はず、嫡子繼信は八島にて討たれ、弟忠信は都にて失せけるとばかりにて、委しき事をも知らずしてひとり悲しむ身を知る雨の、晴れぬ心や慰むと、この攝待を始めて候。札を立て、よりこの方、一日に五人三人乃至一人二人、絶ゆる事はましまさねども、十二人は是が初めに候。いづれが我が君ぞ、何れかそにてましますぞ、夜も更けたり、人の知るべ

き事にもあらず。この姥が耳にそと御敷へ候はゞ、この攝待の利生にて、地誦「空しくなりし兄弟を、再び見るとおもふべし。再び見るとおもふべし。上歌「親子よりも主従は、親子よりも主従は深き契の中なれば、さこそ我が君も哀れと思召すらめ、殊更御爲に命を捨てし郎黨のひとは母ひとりは子なり、などや弔ひの、御言葉をも出だされぬ、かほど致ならぬ、身には思ひの無かれかし、あら恨めしの浮世や。あら恨めしの浮世や。」

ワキ詞「是は思ひもよらぬ事を承り候物かな。我等如きの山伏の、五人三人行き連れ、通り候が、今夜此攝待に十二人著きたればとて、判官殿とはかゝる卒忽なる事を承り候物かな、さりながら、繼信忠信の母にてましまさば、判官殿の御内の人の名字をば御存じ候べし、そなたより名を指して承り候べし。シテ詞「仰せの如く我が子は御内に在りし者なれば、大方は推量申すとも、さのみはよも違ひ候はじ。兼房詞「かやうに物申す山伏をば、どこ山伏と御覽じて候ぞ。シテ詞「まづ只今物仰せられつる客僧は、この御供の内にては一の老體にて御入り候な。いでこの御供の内よりたるとる人は誰ぞ。や、今思ひ出したり、判官殿の御傳、増尾の十郎權の頭、兼房山伏にてましますな。又あれなる山伏はどこ山伏にて御渡り候ぞ。鶯尾詞「是は出羽の羽黒山より出でたる客僧にて候。シテ詞「いや是は播磨の人の聲にて候。それは如何にと申すに、この姥はもと播磨の者、十三の年繼母を怨み都に上り、誦「故庄司殿と契り、繼信忠信を儲け、今かく憂き目を見候へば、た

だ怨めしうこそ候へ。詞「されば我が國の人の聲なれば、などかは知らで候べき、いでこの御供の内には播磨の人は誰ぞ、是も思ひ出して候。判官殿鴨越とやらんを通り給ひし時、狩人の姿にて参りあひ、そのまゝ名字賜はり、今までも御供と聞えし、鶯の尾の十郎山伏にて御渡り候な。ワキ詞「さてかう申す山伏をば、どこ山伏と知るし召されて候ぞ。シテ詞「この御聲こそ大事にて候へ。都の人の聲かと思へば、又近江の人の聲にも似たり。物仰せられ候も何とやらん物々しく見え給ひて候あつばれ是は西塔山伏ござめれ。それならば本は近江の人、三塔一の勇僧、今は又我君の、誦「一人當千の武士よなう。地誦「武士も物の哀は知るものを、などされば餘りに、御心強くましますぞ、明かせ給へ人々と、よそ眼も知らず泣き居たり。

子詞「かく心もなき人々に、さのみ心を盡し給はんより、今は早御内へ御入り候へ。判官詞「暫く候。誠繼信の御子ならば、判官殿とおぼしきを指し給ひ候へ。子誦「承りて候とて、十二人の山伏の、皆御顔を見渡して、是こそそにておはしませ。判官詞「さてそにてあるべきとは何故に仰せ候ぞ。子詞「いや如何に包ませ給うとも、人にかはれる御粧ひ、誦「疑ひもなき我が君よ。上歌地誦「父給べなうとて走り寄れば、岩木を結ばぬ義經なれば、泣く／＼膝に懐き取る。實にや梅檀は、二葉よりこそ匂ふなれ、誠に繼信が子なりけりと、よその見る目まで、皆涙をぞ流しける。

ワキ詞「今は何をか隠し申すべき、我が君にて御座候。この上は御座を直され候へ、老尼も近う

御参り有つて御目にかゝり申され候へ。シテ詞「あら有難や候。我が君を拜み参らするにつけて、子供の事こそ思ひ出でられて候へ。ワキ詞「實に〜尤にて候。シテ詞「如何に申し上げ候。繼信が八島にての最後のありさま剛なりとも申し、又不覺なりとも申す、何れか眞にて候やらん承りたく候。判官詞「如何に辨慶、ワキ詞「御前に候。判官詞「繼信が八島にての最期の様を、委しく語つて老尼に聞かせ候へ。ワキ詞「畏つて候。御説と申し所望と云ひ、懇に語つて聞かせ申し候ふべし。御前近う御参り候へ。物語「さて八島の合戦、今はかうよと見えしに、門脇殿の二男能登の守教經と名乗つて、小船に取り乗り磯間近く漕ぎ寄せ、如何に源氏の大将源九郎義經に、矢一筋参らせん受けて見給へと罵る。かう申す各々を始めとして、皆御矢面に立たんとせしが、何とやらん心おくれたりし所に、繼信は心勝りし剛の人にて、御馬の前にかげ塞がつて、義經これにありやとてにつこりと笑ひて控へたり。さてその時に教經は、彎き設けたる弓なれば、矢坪を指してひやうと放つ、過たず繼信が著たりける、鎧の胸板押しつけ上巻、かけずたまらずつ、と射通し、後に控へ給ふ我が君の、御著背長の草摺にはつたと射留む。さてその時に繼信は、馬の上にて乗り直らんとせしかども、大事の手なれば堪へずして馬より下にどうと落つやがて我が君御馬を寄せ、繼信を陣の後に昇かせ、如何に繼信、如何に〜と宣へども、たんだ弱りに弱つて終に空しくなる。なんぼう面目もなき物語にて候。シテ詞「さてその時に弟の忠信は候はざりけるか。ワキ詞「あら愚や

忠信は、日の下に於て隠れましまさず、能登殿の童菊王丸、繼信が首を目懸け渚の方へ走り渡るを忠信引いて放つ矢に、菊王が眞中射通されかつばと轉べば、教經舟より飛んで下り、菊王がわだかみ掴んで、遙の船に投げ入れ給へば、程なく舟にて空しくなる。眼前兄の敵をば、弟の忠信こそ取つて候へ。シテ詞「さては敵も大将に、仕へ申し、御童、ワキ詞「繼信は又我が君の、隠藏におぼせし御内の人、シテ詞「彼は平家の舟の内。ワキ詞「此方は源氏の陸の陣、シテ詞「彼も主従、ワキ詞「是も主従、シテ詞「思は同じ思なれば、ワキ詞「よその歎きを思ひ合はせて、御慰みも候へとよシテ詞「それは仰までもさむらはず、御身代に立ち参らする上は、今世後世の面目なり。さりながら一人なりとも御供申し、御笈をも肩にかけ、この御座敷にあるならば、地謡「十二人の山伏の、十三人も連りて、只今見ると思はゞ、いかゞ嬉しかるべき。クセ「其時義經、老尼に語り給ふやう八島にて繼信、今はかうよと見えし時、思ふ事あらば、委しく言ひ置けと、くれ〜尋ね問ひしに、繼信その時に、息の下より申すやう、弓矢取る身の、御身代に立つ事、二世の願や三世の御恩をすこし報謝する、命の輕き身は、露塵何か惜しからん。さりながら故郷に、八旬に及ぶ母と、十に餘る童、是等が事の不便さぞ、少し心にかゝる雲の、月に覆ひて、光も闇くなる如く、そのまゝ、くれ〜と、終に空しくなりにけり。判官詞「かやうに郎等を討たせつ、地謡「自から手を碎き、忠勤まこと曇らずは、終に治まる世に出でて、繼信忠信が、子孫を尋ね出して、命の恩を報せんと、

思ひし事も空しく、我さへかゝる姿にて、其名をだにも名乗り得ぬ、憂き身の果ぞ悲しき。シテ講「母は思に堪へ兼ねて、更くるも知らず有明の、月の盃取りいだし、御酌にこそ参りけれ、判官講「實にや心を汲みて知る、人の情の盃を、涙と共に受けて持つ。子講「鶴若酌に立ちかはり、別れし父の御前にて、給仕すると思ひなして、地講「十二人の山伏の、終夜の酌を取り廻り、座敷にも直らで、進み勇める有様を、父に見せばやとぞ思ふ。さる程に、夜もほのくくと明け行けば、夜もほのくくと明け行けば、暇申してさらばとて、はやこの宿を立ち出づる。子講「如何に誰かある馬に鞍置き、弓韃参らせよ。君の御供申さうするに。シテ講「そも御供とは何事ぞ。子講「君の御供申してこそ、親の敵にも逢ふべけれ。シテ講「それは弓矢の御供なり、是は修行の山伏道に、何の敵のあるべきぞ。子講「さあらば思ひ出したり、小さき頭巾蓑掛を、とく拵へて給ひ給へ、山伏道の御供せん。ワキ講「辨慶涙を押さへ、つ、何如に申さん鶴若殿、まこと御供有りたくは、今日は道具を拵へ給へ、明日は迎ひに参るべし。子講「まことさふか。ワキ講「なか／＼に。ツレ講「我も迎ひに参るべし。ワキ講「我も迎ひに参らんと。地講「面々聲々にすかされて、いとけなき身の悲しさは、誠ぞと心得て、少し言葉の弱りたる、折を得て客僧は、泣く／＼宿を出でければ、シテ講「老尼は鶴若を抱き入れ、地講「行くは慰む方もあり、留まるや涙なるらん。とまるや涙なるらん。

女子用 第十八課 慈善家キヤサリン

舊讀本其の儘の教材で立派な修身教材です。

貧苦の中に人と成り、早く夫に別れ、而も母は狂し、子は病むと云つた人間苦のどん底にあつて、尙能く人を助け世を救ふた彼が一生は何人も感嘆措く能はざるところで、眞に人間愛の最高潮を示したものと云へませう。

文は六段に分れ、第一段は生立から人と成るまで、第二段は家庭に於けるなやみ、第三段は一寡婦と二兒の救済、第四段はコレラ病の流行と貧民の救済、第五段は孤兒貧兒の救済、第六段は結尾で愛の生涯となつてゐます。

「十九世紀の初、イギリスのランカシャにキヤサリンと言ふ婦人あり。云々」

此の段はキヤサリンの生立から人と成るまでのことで、彼が貧しい家に人と成つて、あらゆる困苦缺乏と戦ひ、能く自給自足したあたりに無限の教訓が含まれます。冒頭の一貴婦人が臨終の際に教訓した「たとへ貧苦の中にありとも、生涯人の爲に力を盡すべし。」は全文

に於ける骨子で、彼は實に此の教訓を實行し得た者で、其の生涯は此一語に盡きてゐます。好事魔多しで、多年の貧苦の後、やつと家庭の和樂を見んとして、不幸夫に別れ、しかも實母は明を失ふに至つたといふ。彼の生涯は生立其のものが既に血と涙の闘争だつたのであります。

「弱り目にたいり目とはこれなるべし、キャサリンの母は精神狂ひて、云々」

此の段はキャサリンが家庭に於けるなやみで「弱り目にたいり目」の一句がびたりと据つてゐます。

若くて夫に別れ、盲目の母と二人の遺子を抱いて、或は工場に通ひ、或は市に物をひさいで、僅に其の日の煙を立てゝゐたキャサリンに對して、天は茲に更により大なる試練を加へたのであります。狂へる母と病に泣く子をみどりながら、貧苦と戦ふキャサリンの境地は、想像しただけで同情の涙を注がないではゐられないでありませう。

「或時、一寡婦の二兒を携へてさまよひ來たれるあり、云々」

此の段は一寡婦と二兒の救済です。前段までは彼が家庭苦で、此の段からは愛の權化としての彼を描き出してゐます。人間苦のどん底にありながら、不幸な一寡婦を見ては漫然それ

を見過すことが出来なかつたのであります。そこから所謂我身をつめつて人の痛さを知れて、我身の辛さ苦しさはキャサリンに取つては同情の涙となり、慈悲博愛の心となつて發露したのであります。殊に恩と義理とに背いて、裏切つた親子に對してさへ、尙ほ能く寛容な態度を取つたあたりは、キリストの所謂片頬を打たれたら片頬を出せて、こゝまで行つたらもう立派な宗教になつてゐます。

「一千八百三十一年コレラ病の始めてイギリスを襲ふや、云々」

此の段と次の段とは彼が人類愛の發露で、此の段は貧民の救済、次の段は孤兒と貧兒の教養です。彼が愛と慈悲とは漸次遠心的に振幅を加へ、初めは家庭、次は隣人、最後は廣く社會公衆に及んだあたり、愛の權化としての彼の生涯は、もう立派に人格を超越して神格佛性と合致してゐます。宗教も道徳も此の敬虔な性格の中にこそ芽ぐみませう。彼の魂は既に宇宙の魂と合致してゐるのです。

「キャサリンの生涯は感化と慈善とにありき、云々」

結尾の一段は頗る力があります。「キャサリンの生涯は感化と慈善とにありき」といひ「キャサリンの手に慈善の行はれしは、一に勤儉の賜物なりき」といひ、以上述べ來つた愛の生

涯を背景にして、一段の嚴肅味を覺えます。勞作倦むことなく、秒を銀に化し分を金に化し、云々の結句は、全文を収約して一段の光彩を添へてゐます。あゝキャサリン、キャサリンの生涯は何といふ貴い生涯でせう。

女子用 第二十課 鏡

従來の讀本にも出てゐた教材ですが、女子用の讀本としては是非無ければならぬ教材の一つです。全篇鏡の賦とでも云ふべき形で、日毎に接する鏡に對して、姿ばかりでなく心の善悪までも寫し見なければならぬことを教へてゐます。

「かゞみ」は赫見の義にして、光輝ありて物象を映すより來れるなりと云ふ。支那にては淵鑑類函所引の潜確類書に、「昔黃帝氏、液_レ金以作_二神物_一、於是爲_レ鏡、凡十有五」とあり。軒轅內傳に、「帝命_二王母_一、鑄_二鏡十二_一、隨_レ月用_レ之、此鏡之始也」とあり。天中記に「舜臣尹壽鑄_レ鏡」と見ゆ。我が國にては日本書記_代神に、國常立尊の御子に天鏡尊の名あり。同書の伊弉諾尊の御子を生み給ふ條に、「吾欲_レ生_二御宙之珍子_一、乃以_二左手_一持_二白銅鏡_一、則有_二化出之神_一、是謂_二大日靈尊_一、右手

持_二白銅鏡_一、則有_二化出之神_一是謂_二三月弓尊_一と見ゆ。太古の事は深く記録に信を措き難しと雖も、とにかく鏡のありしは和漢共に久しきを知るに足るべし。其製作に就きては、淮南子に、「明鏡之始型蒙然、及_下粉_レ之以_二元錫_一、摩_レ之以_二白旃_一、則鬢眉鬢毛可_二得而察_一」とあり。和漢三才圖會には、「凡造_レ鏡唐金白日和_{（唐金乃鐵和_二亞鉛_一成）}、鑄_レ型爲_レ鏡、而用_二厚朴炭_一數、如其鏡面凸、裏平直、則見_三影爲_二異形_一とあり。鏡は本來の性質としては、衣冠を整へ粉脂を粧ふに用ふる具なれど、其の煌々として物象を映すことの鮮麗なるより、これを神異なりとするの思想、智識の幼稚なる時代には自然に起り、抱朴子に、「萬物老者、其精悉能_二化人形_一惑_レ人、唯不_レ能_レ易_一鏡中眞形_一、故邪鬼不_レ敢近_一、可_レ以_二徑九寸以上者_一」とあり。淵鑑類函所引の地鏡圖には、「欲_レ知_レ寶所_レ在、以_二大鏡_一夜照見_レ影、若光在_二鏡中_一者、物在_レ下也」と見え、五雜俎に、「凡鏡無_レ它、但水清冽則佳矣、逾古逾佳、非_二獨取_三其款識美_一、亦可_下避_二邪魅_一、讓_二火炎上、周欠齋鏡閣中視_レ物如_レ畫、向_レ鏡語則鏡中影應聲而答、秦方鏡照_二人心膽_一、秦准漁人鏡、洞見_二五臟六腑_一、隨王度鏡能却_二百病_一、宋呂蒙正時、有_二古鏡_一能照_二二百里_一、太明嘉祐年中、吳僧鏡、照_二見前途吉凶_一孟蜀張敵鏡、光照_二一室_一、不_レ假_二燈燭_一」とあるなど支那には其の類甚だ多し。我國にても亦非常に尊重せられ、天照大神の岩戸隠れの際には、思兼命のはからひにて、石凝姥命は八咫鏡を造り、禰に懸けて大神を誘ひ出し奉り、瓊々杵尊の降臨にあたりては大神これを草薙劍、八坂瓊勾玉と共に授けて、此鏡

を見ること、我を見るが如くせよと勅りたまひ、爾來永く三種の神器として皇室の寶璽となり、日本武尊の蝦夷征伐には大鏡を船頭に掛け、其の他屢々鏡を神社、佛閣に納められし事諸書に見え、又神體としてこれを祭る事今に至りても變らず。鏡面に佛像を彫りしは、懸佛として中古より行はれ、婦人は特に鏡を女性の魂として疎かにせず。假にもこれ跨ぐが如きことをなさず。鏡臺に守袋を掛けし事雅亮裝束抄に見ゆれば、治承の頃既に此の風ありしと思はれ、松山鏡の傳説は謠曲に存すれど、其由來蓋し久しきものにて、鏡を神異なるものとせしに基きしかと考へらる。

文は三つに分れ、第一段は鏡が何等私心なく、是非善惡の姿をうつし出すと云ふこと、第二段は鏡が古來女子の魂とされてゐると云ふこと、特に我國では神靈として崇められてゐると云ふこと、——となつてゐます。

「鏡は一物を貯へず、私の心なくして萬象を照すに、云々」

此の段は立派な小品の形となつてゐます。冒頭先づ「鏡は一物を貯へず私の心なくして、云々」に筆を起して、鏡が形をうつすと共に、是非善惡の心を其の儘にうつし出すことを述べ、古歌の「鏡には姿ばかりのうつるぞと思ふ心の恥づかしきかな」に筆を結んでゐます。冒頭の「鏡は一物を貯へず、私の心なくして、云々」は南朝の忠臣北畠親房の名著「神皇正

統記」に出てゐます。参考のため其の部分左に摘録して置きませう。

その後、天照大神高皇產靈尊相計りて、皇孫を降だし給ふ、八百萬の神教を承りて、御供に仕奉る、諸神の上首三十二神あり、その中に五部の神と云ふは、天兒屋命、天太王命、天細女命、石凝姥命、玉屋命なり、この中にも中臣忌部の二神は、むねとの神教を受けて、皇孫を輔け守り給ふまた三種の神寶を授けまします、先づ豫め皇孫に教して宣はく、葦原の千五百秋の瑞穂の國は我子孫可レ王之地也、宜爾皇孫就而治焉、行矣、寶祚之隆當與天壤無窮者矣、又大神御手に寶鏡を持ち給ひ、皇孫に授けてほぎて、吾兒視ニ此寶鏡一、當レ猶レ視レ我可三與同レ床共レ殿以爲一齋鏡一、と宣ふ、八坂瓊の曲玉、天の叢雲劍を加へて三種とす、又この鏡の如くに、分明なるをもちて天下に照臨し給へ、八坂瓊のひろがれるが如く、曲妙を以て天下をしるしめせ、神劍をひきさげて、順はざるものを平げ給へと、救ましくけるぞ、此國の神寶にて、皇統一種正しくましますこと、誠に是れらの教に見えたり、三種の神器世に傳ふこと、日月星の天に有るに同じ鏡は日の體なり、玉は月の精なり、劍は星の氣なり、深きならひ有るべきにや、抑々彼の寶鏡は、さきに記し侍べる石凝姥命の作り給へりし八咫の御鏡、王は八坂瓊の曲玉、玉屋命作り給へるなり、劍は素戔嗚尊の得給ひて、大神に奉られし叢雲劍なり、此の三種につきたる神教は、正しく國を手持ますべき道なるべし、鏡は一物をたくはへず、私の心無くして、萬象を照すに、是非善惡の姿現はれずと云ふ事なし、そ

の姿に従ひて、感應するを徳とす、これ正直の本源なり、玉は柔和善順を徳とす、慈悲の本源なり、
劔は剛利決断を徳とす、智恵の本源なり、この三徳を禽受けずしては、天下の治まらんこと、誠に
かたかるべし、神敎明かにして、詞約に旨廣し、利へ神器に表はし給へり、いと忝き事にや。

「鏡は古より女子の魂として、男子の刀に類へ言へり、云々」

此の段も矢張り立派な小品の形になつてゐます。後段の「閻魔の廳に淨玻璃の鏡あり、云々」に就いては日本百科大辭典に、

閻魔王廳は地下五百尺善那にありて、無佛世界と名け、鐵の大城にして四方に鐵門を開く。
廳前に檀茶幢あり、上に人頭形を安じてよく人間の行爲を監視す。右を黒闇天女幢といひ、
左を太山府君幢と名く。別に光明王院・善名稱院の二院ありて、光明王院には淨頗梨鏡を
置きて亡者の罪行を映出し、善名稱院は地藏菩薩の淨土にして、七寶を以て莊嚴し、眷屬
と共にこれに住して地獄の有情を濟度すと云ふ、云々とあります。

「我が國民の鏡を重んずることは、其の由來甚だ遠し、云々」

此の段は特に我國では鏡が神靈として崇められてゐることを述べて、神秘的國風の一端を

想像させてゐます。卷末の

柳葉にかくる鏡をかゞみにて

人も心を磨けとぞおもふ

の御製は明治三十七年の御詠で、此の年には鏡と云ふ御題で、此の外に次の二首を御詠出になつてゐます。

國といふくにかゞみとなるばかり

みがけますらを大和だましひ

くもりなく世をたもてとて千早ぶる

神のさづけし鏡なるらむ

鏡に就いての御製は尙此の外に、明治三十九年の御製に、

靖國のやしるにいつくかゞみこそ

やまと心のひかりなりけれ

明治四十三年の御製に、

世の中の人のかゞみとなる人の

おほく出でなむわが日の本に
などがあります。

昭憲皇太后は流石に御女性で、鏡に關する御歌が少くありません。

思ふことあればありけに見ゆるかな

心うつさぬ鏡なれとも

は明治十二年、

朝毎にむかふ鏡のくもりなく

あらまほしきは心なりけり

まさかきにかくる鏡のくもりなき

世をこそいのれかしこ所に

は明治三十一年、

朝なくかきみにうつすわが影の

いつともなしに老ひにけるかな

は明治三十五年、

朝ごとにむかふかきみのいつはらぬ

老の影こそやさしかりけれ

は明治四十一年の御詠です。

附説の資として最後に鏡に關する傳説の二三を擧げて置ませう。

鏡の破片鵠となる

昔漢に夫婦のものあり。夫遠國に行く時、妻の手刷したる鏡を破つて二片とし、一片を懷にして一片を妻に残し、再會を契る。然るに其妻、夫の不在中人に通じけるに、夫の残せる鏡の一片化して鵠となり、遙に飛で夫の所に到り、兩破片合着して舊の如く一鏡となる。夫これに因り妻の不義を知り大に嘆ぜりと云ふ。

鏡の靈威

古來鏡は婦女の魂又は守りとして裾にもかけざるやう清淨にすべきものとなす。これ天照大神が陰に象る鏡を御魂とせさせたまひし故實に基くものなるべし。昔或館にて新に磨かせたる鏡を箱に入れ置きしに、婢誤りて踏越えたるを知らでありき。明日開き見るに、鏡

は黒く曇りぬ。これ婢が月の障りにてありしに因ると云ふ。

松山鏡

越後國松山の山家の男、娘一人もてり。其妻病みて亡せしを、娘嘆き悲しむこと限りなし。三年ばかりありて、父持佛堂に入りて香花を手向けたるに、娘何物かを取隠す風情なるを見て怪しみ問ふ。亡き母の形見にかゝる物たびたりとて、鏡を取出して父に示しつゝ、母の面影の此物に残りて見えたまふと、娘は物語りて泣く。こは鏡といふものにて、かゝる山家には見知らぬものなり。子は親に肖るものなれば、己が影のうつりたるを母の面影と思ひて、母を慕ふ稚心の不便さよと、父も泣きけりと云ふ。

長者と酒瓮

昔、天竺に長者ありて、藏の中に酒を造る。長者の妻、藏に入りて酒瓮を見るに、若く美しき女あり。大に恚りて長者に語りしを、長者不審に思ひて行きて見るに、瓮の中に男子を隠したり。長者また其婦に恚る。かくて二人相恚りてあるを、一人の羅漢來りて酒瓮の

中を見るに、男も女もなし。さればと思ひて、彼の酒瓮を取出させて打毀ちたるに、夫婦始めて其意解けぬ。朝夕飲酒に本性を亂りたるこそあさましけれ。

補充文には武島羽衣氏の「鏡の歌」を擧げておきませう。

鏡の歌

かみくしけづる春の縁
すがたよそほふ秋の窓
ちりもおかせず朝夕に
妹が手馴らす紐かゞみ
ふと取外すあやまちに
おとせばあなや忽然と
片々飛びつこ、かしこ
暫しは影をうさねど

女子用 第二十課 鏡

鏡師一たひづくろへば
ありしひかりは玲瓏と
水輪かゝるはたのうへ

芳草かぶるつゝみぞひ
ゆるくながるゝ里川や
花笠かざすうぐひすの
化粧たすくる水かゞみ
底はへ澄めばゆくりなく
鮎子をどれずたちまちに
柳眉花唇のかげ消して
立つや百千のさゞれ波
さばれ見るまに静まりて
ふたゝびきよき水の面
うつるものどか雲の上

學問のやすり技藝の砥
晝はひねもす夜もすがら
身をば磨きてもろびとの
鑑とならん人々よ
光明いつか遍照と
ひとたび世には輝くも
まよひのくもり罪の塵
ましてや惡のうな槌に
蔽はれけがれ碎けなば
かひなき姿とことかはり
ひかりは消えて千秋の
恨は盡きじあゝ盡きじ

女子用 第二十課 鏡

女子用 第二十一課 温泉を問合す

問合せの手紙です。ロイマチスの母に入湯させるため、心安い友人に温泉の場所と旅館とを問合せたもので、無駄がなくてしかも頗る要を得てゐます。

すべて文章は辭簡にして能く意を盡すを以て理想とします。就中書簡は簡潔を第一としなければなりません。多くの場合に於て文句の冗長に流れるのは頗る禁物です。人によると書簡の短いのは、相手に對する尊敬若くは愛憐の情が薄いやうに誤想するものもありますが、辭簡にして情多きは、情少くして辭多きに勝つてゐるのは無論です。情の厚薄は辭の長短にあらずして、意の如何にあります。書き列ねた文句ばかりが如何に長かつても、其の情が濃かでなかつたら、それは唯繁文縟禮に終るばかりです。世に澤山な仕事を持つてゐる人は、一日の中に數通若くは數十通の書簡に接します、是等の人に、徒に長く、だく、しい書簡ばかりに接しましたら、恐らくそれは苦痛の一つに違ひありません。しかも世に事業をしようといふ程の人は、如何に苦痛であつたからとて、自分に宛て、來た書簡を詳しく披見しな

いで投棄てるやうなことは出来ません。ですから斯んな人に向つて繁文縟禮を重ねるのは、洵に心無い所爲だと云はなければなりません。よしそれほど多忙でない人に對しましても、交通が日々頻繁を極め、何人も時間を尊重しなければならぬ今日に當つて、役にも立たない事を長々しく書列ねるのは、如何なる點から云つても決して褒むべき事ではありません。要するに用事を以て旨とする日用文は、成可く簡單にして事の誤解を生じないやうにするのが第一です。

次に趣味の書簡又は用事を主としない手紙などでも、あまり長いのは好ましくありません。これも成べく簡單明瞭に記して、誤解を生じないやうに心掛けなければなりません。しかし此の類の書簡の長いのは辛抱されないこともありませぬ。だがこれも成べく簡單にして趣致多く、情濃やかにして正確を失はないやうに心を用ひなければなりません。以上の心掛けを餘所にして千言萬語を列ねましても、それは所謂「言葉多きは品少し」と云ふ弊に陥りませう。されど一概に簡單と云ふのも弊がないでもありません。例へば旅行先から父母の許へ情況などを報ずる手紙には、強ち簡單なばかりを以て能く其の體を得たものとは云へませぬ。言ふまでもなく簡單にして其の要を盡し得ましたら、それに越したことはありませんが、こ

これは餘程優れた筆の力を持つた人でなければ望まれません。ですから斯様な場合には、簡單と云ふよりも寧ろ親切懇篤ならんことを旨とし、場合に依つては日記の全部を記して置いても差支へはありません。

要するに書簡文の作法は、書簡を受取る人の身分になつて考へて見ますと、どんなものが宜いかと云ふことは自ら明瞭になりませう。

斯うした意味から眺めて、此の手紙は殆ど理想的に出来てゐます。簡單にして要を得た點からいつても、情味豊かで相手方に好い感じを與へた點からいつても、確かに情實兼備へた出色のものと云へませう。

補充文には佐々木信綱氏の「文のしをり」から、「紅葉の便を山里に問合す」を挙げておきませう。

紅葉の便を山里に問合す

思はぬ御無沙汰いたしをり候。去年の暮御出の折の御物語にて御地の様子承り候うてより、是非一度御尋ね申したく存居り候ひしに、春の頃は必ずと思ひ立ちつゝ障ありて果さず、

いつしか秋風身にしむ今日と相成り候。さて、その折、御あたりは紅葉いとよろしと承り及び候ひしが、見頃は何日頃にて候はん、御知らせたまはりたく願上り候。この品々この頃東京にてはやり候ものに候まゝ、御娘君たちに差上げ候。まづは御伺ひまで。時節柄御厭あらまほしく候。かしこ。

女子用 第二十四課 月見草

新讀本の中でも傑出した教材の一つです。

原文は阿部次郎氏の「北郊雜記」で、氏一流の敬虔で内省的なところは、精鍊嚴肅な筆致と相俟つて、文に一段の生彩を添へてゐます。

阿部次郎氏は哲學者として將又美學者として、新人間に重きを爲してゐるのは世間周知の事實で、夙に論壇の雄として文藝界に異彩を放つてゐるのも人の知るところであります。彼はあくまでも敬虔にして謙遜なる態度を以て、古聖賢の道を求めつゝある若き修道者です。其の沈潜的内省的なところは、早稲田の片山伸氏と共通してゐますが、伸氏よりも更に宗教

的で突きつめた所があります。其の文章の精緻も仲氏に似て更に彼以上に出でゝゐます。明治十六年八月山形縣飽海郡上郷村に生れ、現に文學博士で東北大學教授の職にあります。「倫理學の根本問題」「美學」「三太郎の日記」「阿部次郎論文集」「ツアラトウストラの解釋並に批評」「北郊雜記」等の著があります。

「北郊雜記」は氏の隨筆集で、大正六年十二月から大正十一年二月に至る、各種新聞雜誌に掲載した短篇を収録してあります。原文は其の七項「靜寂」の中の一章で、大正十年七月の作なのであります。参考のため左に其の原文を擧げて置きます。

月見草ば私の好きな花の一つである。とり放して云へば、黄色は自分の特に好きな色の部類に屬してゐるものではないが、あの花瓣の柔かさと、あの清新な鮮かさと、又その花を見る夕暮や曉のすがすがしきとは、月見草のほのかな黄色を云ひ難くなつかしいものに思はせるのである。

自分は一昨々年の夏、輕井澤で見た月見草の野原を忘れることが出来ない。朝まだ暗いうちに狭苦しく満員になつてゐる停車場前の旅亭を出て、同宿のI君M君と新舊兩市街の間の野原を歩いた。月見草が曉に近くいくらか萎れかかつて限りもなく咲き續いてゐる上を、山の霧が廣く流れてゐた。自分達は言葉少なに並んで歩きながら、何とも云へず親しい氣持になつて又旅舎に歸つた。

今自分の家にも一株の月見草がある。二三日前の夕暮、私は月見草の咲くところを眼のあたり見た。二階の欄干に凭つて食後の煙草をふかしてゐると、庭の月見草の蕾が急にふくらんで來るのが見えるやうに思はれた。昔の人か蓮の花の開く音をきいて悟をひらいたといふ話をかすかに想ひ起しながら、急いで庭に出て月見草の傍にしゃがんで見てゐると、如何にも今咲きかけてゐる蕾の幾つかがある。最初に花瓣をつゝんでゐる蕾が後退を始める。蕾が開くと巻かれてゐた花瓣が次第にふくらんで來て、不意に一ひらが急にはじける。さうすると四つの花びらが一緒にふうわりと開いて來て、遂に蕊を見せて咲いてしまふのである。その咲きはじめに、ほのかな香氣が鮮かに鼻をうつときの氣持はなんとも云はれない。明日の朝になればしぼんでしまふ果敢ない花ではあるが、咲く時の新しさは、それだけに格別なのかも知れない。

私のやうなものには、月見草の咲くのを見ても固より悟りは開けない。併し悟りが開けなくとも新しく咲く花を見まもる靜かな愛のこゝろは、本當にありがたいものであつた。

尙此の章の前章及び前々章には、氏の所謂靜寂觀が可なり嚴肅な態度で叙せられてゐますが、此の二章は此の教材と思想上離すべからざる關係を有してゐます。教材研究の資として左に其の部分と並録して置きます。

静寂

1

凡ての人は死ななければならぬ——吾々は往々にしてこの牢乎として抜くべからざる事實を忘れようとする。併し心を鎮めてしみじみとこの事實を想ひ起すとき、吾々はどれほどの涼しさと寂しさと人なつかしさとを感じるのだらう。貴族も平民も、學者も無學者も、資本家も労働者も、凡ての人はいつかは焼かれて灰になるか、埋められて腐るかしなければならぬ肉身を持つてゐるのである。吾々の心が憎みに燃え争ひに熱するとき、吾々は振返つてこの事實を見へて考なければならぬ。同じやうに死すべき運命を持つてゐるといふ自覺は、争ひの唯中に於ても、吾々に愛と和ぎとのこゝろを教へるであらう。

一 昨年秋たゞ一人の男の子を失つてから、私は漸くこの事實の意味を悟ることが出来たやうに思ふ。併し日を経るに従つてこの意識も次第に日常生活の騒がしさに溺らされて行く。あの當時のつきつめた寂しさと人なつかしさとを忘れがちな近頃の私は、決していい状態にあるとは云ひ難い。併し心持の騒がしさに堪へがたくなる毎に、私は振返つてあの當時のことを想起する。さうして凡ての人は死ななければならぬといふ眞理の反芻を試みる。かう云ふ心持になるのも亦、死んだ

兒があゝの世から俗念の多い父を警醒するのだと、思へば思へないこともないのである。

2

静寂は何の物音もしないふことではない。それは音響の缺乏といふやうな消極的なものではなくて、積極的に人に迫る力を持つ或物である。それだからこそ、泌みつくやうな静かな周圍の中に、木の葉一ひらの散る音さへ、一層その静寂を深くし、眞夜中になく犬の遠吠が寂しい片田舎の丑滿時を更に寂しくするのである。ニイチエのツアラツストラに「犬も幽霊を信ずる眞夜中」といふ句があるが、東北の僻陬に育つた私のやうな者は、この句が文字通りに自分の體驗にあてはまることを感ぜずにはゐられない。幼い頃の自分にとつては、静寂はなつかしいよりも寧ろこはかつた。それほどまでに自分は静寂にとり巻かれてゐた。併し成人して都會の中にまじるに従つて、あの恐ろしかつた静寂がいつの間にか自分のあこがれの國となるまでに遠ざかつてしまつた。眞夜中に不圖眼をさまして見ても、子供の時分に感じたやうなしみじみした静寂を感じることはもう出来ないことを覺える。併しそれは「境」が悪いのか、自分の「心」が静寂と縁がなくなるほどに騒がしくなつてしまつたのか、この間にはまだ疑問の餘地があるやうに思ふ。嘗て叡山にのぼつて根本中堂の傍にある宿坊にとまつた夜、自分は明かに静寂にとり巻かれてゐることを感じた。さうして翌朝曉に起きて兩戸を繰り、青葉を埋めて深くこめた霧を通して時鳥の啼聲をききながら、私はまだ静

寂に對する感覺を失はぬ自分を祝福した。その後十餘年の月日は流れたが、私はこの間に心ゆくほどの静寂の體驗を想起し得ぬことを遺憾に思ふ。それは依然として境が悪いのであるか、それとも今度はもう静寂と縁がきれてしまふほどに心が騒がしくなつたのであるか、この夏山中に入つたら一つそれを試して見たい。

『月見草は私の好きな花の一つである、云々』

冒頭の一段は月見草に對する筆者の感興で、特に色彩に對する好尚が其の中心となつてゐます。筆者が特に月見草に對して静寂の念を抱いてゐるのは、其の花が軟かで、如何にもなよくしてゐて、しかも夕方静寂の氣が迫つて來る頃に開花すると云つたあたりにあります。原文の前章に、

凡ての人は死ななければならぬ——吾々は往々にしてこの牢乎として抜くべからざる事實を忘れようとする。併し心を鎮めてしみじみとこの事實を想ひ起すとき、吾々はどれほどの涼しさと寂しさと人なつかしさとを感ずることだらう。

とありますが、こゝらが此の文の由つて來たる所以で、氏が特に月見草を題材に取つて「静寂」の一項としたのも、成程と合點させませう。殊に筆者の此の静寂觀は、彼が愛子を亡つたと云ふところに基因してゐるといふことも、見逃し難いところでありませう。

原文の前節に、

一 昨年の秋たゞ一人の男の子を失つてから、私は漸くこの事實の意味を悟ることが出來たやうに思ふ。併し日を経るに従つてこの意識も次第に日常生活の騒がしさに溺らされて行く。あの當時のつきつめた寂しさと人なつかしさとを忘れがちな近頃の私は、決していゝ状態にゐるとは云ひ難い。併し心持の騒がしさに堪へがなくなる毎に、私は振返つてあの當時のことを想起する。さうして凡ての人は死ななければならぬといふ眞理の反芻を試みる、かう云ふ心持になるのも亦、死んだ兒があゝの世から俗念の多い父を警醒するのだと思へば思へないことのないのである。

とありますが、斯うした思想を背景にして、此の文を読んで見ますと、月見草の前に立つて花を見つめてゐる筆者の氣持が、はつきりと想像されるやうな氣がします。つまり筆者に取つては、月見草が單なる月見草では無く、何か其處に深いある一種の言ひ難い感興があつたのであります。それは即ち筆者の靜寂觀で、其の靜寂觀が此の月見草となつて現はれたものだと思はれます。

月見草は柳葉菜科に屬する一年生草本で、高さ三四尺に達し、莖葉と共に細毛を有してゐます。葉は長卵形長楕圓形或は廣披針形をなして互生してゐます。花は大形整齊にして花梗を有せず。萼の筒部は子房より上に延長し、花瓣は四個あり、黄色で大形です。雄蕊は八個雌蕊は下位子房を有してゐます。花柱は雄蕊よりも長く柱頭は四個あります。開花は日没の頃で、翌日の日中に至りますと凋衰します。この植物は北アメリカの原産であつて、庭園に栽培せられてゐます。關西地方では往々墓場などに野生してゐますので、一名幽靈草とも云つてゐます。蓋し夕方に花を開くと云ふ意味からでもありません。

「自分は、一昨々年の夏、輕井澤で見た月見草の野原を忘れることが出来ない、云々」

此の段は月見草に對する思出で、段末の「何ともいへずしみりした氣持になつて」の「し

んみりした氣持」が此の段の中心となつてゐます。こゝら原文では

自分は一昨々年の夏、輕井澤で見た月見草の野原を忘れることが出来ない。朝まだ暗いうちに狭苦しく満員になつてゐる停車場前の旅亭を出で、同宿のI君やM君と新舊兩市街の間の野原を歩いた。月見草が曉に近くいくらか萎れかゝつて限りもなく咲き續いてゐる上を、山の霧が廣く流れてゐた。自分達は言葉少なに並んで歩きながら、何とも云へず親しい氣持になつて又旅宿に歸つた。

とあります。旅館や廣場の位置や、一緒に散歩した友人のことなどが、可なり詳しく書かれてゐます。特に此の段の中心となつてゐる段末の「しみりした氣持」と云ふのが、原文では「親しい氣持」となつてゐて、「しみり」と「親しい」の間に幾分の相違があります。

「今自分の家にも一株の月見草がある。二三日前の夕暮、私は月見草の咲くところを目のあたり見た。云々」

此の段は此の文の中心で、月見草の開花する有様を見るやうに描き出してゐます。夕方欄干に凭れて何げなく眺めてゐると、月見草の蕾が急に膨らんで行くやうに思はれた。で直ぐに庭に飛出して、月見草の側にしゃがんでそれを見詰めた。萼が開く、花瓣が膨む、

「ひらばつと弾ける。いゝ香がぶんと鼻を衝く、——そこらの叙述は眞に光景目睹です。斯うした叙述の間にもやはり筆者の静寂観が濃厚に滲み出てゐて、ちつと花を見詰めながら思ひに耽つてゐる筆者の姿が幻のやうに眼前に浮び出ます。段末の「明日の朝になればしぼんでしまふはかない花だけに、咲く時の清新な趣は格別なのかも知れない。」のあたりに、筆者の静寂観が盛上つてゐます。

筆者の住家は東京の市外東中野にあつて、今では人家も立ち込んでゐますが、まだく市内とちがつて庭も広く、郊外気分も頗る濃厚です。

「私のやうな者には、月見草の咲くのを見ても、固より悟りは開けない。云々」

此の段は全篇を収約した筆者の感興で、大體原文と同じですが、併しそここゝ言葉が省かれたり、修正されたりしてゐますので、原文とは餘程趣を異にしてゐます。原文では「私のやうなものには、月見草の咲くのを見ても固より悟りは開けない。併し悟りが開けなくとも新しく咲く花を見まもる静かな愛のこゝろは、本當にありがたいものであつた。」とあつて、「併し悟りが開けなくとも」の一句が省かれてゐます。だがこの一句は是非補つて見なければならぬ一句で、此の一句で全文がびたりと据ります。尙原文の「静かな愛のこゝろ」を

讀本では「見守る静かな心」と修正してありますが、此の「愛」の一字も是非無くして、ならない一字です。そこらは適宜原文を参案して、全文の裏に流れてゐる筆者の静寂観を心ゆくばかりに味はせて見たいものです。

補充文には同じ「北郊雜記」から、次の「雜草」を擧げておきませう。

雜 草

去年の秋植ゑたばかりでまだ疎らな芝草の間に、猛烈な勢で雜草が蔓り出した。まだたけの低いうちは、同じ緑の色にまじつてそんなには眼に立たなかつたが、たけの延びるに従つてそれが眼ざはりになり出して來た。それで私は毎朝まだ涼しいうちに、朝飯前の運動として草取をすることを思ひついた。此頃になれば背の口からしつとりとおりの露が朝になつて益々繁く置いてゐるのを足の足うらで踏む冷さがいゝ心持である。三四十坪ある芝地の片端からそろ／＼と草をとつて行きながら、考へかけてゐることを考へ進めて行くとき、其處には、机の前に坐つてゐるときとは又別様のリズムが生れる。固より私の草取は遊戯の一種に過ぎないが、この遊戯は私に、筋肉労働は——特に土を對手にする筋肉労働は、一種特別の労働であることを感じさせる。筋肉労働だけが勞

働でないことは云ふまでもない、併しそれは頭の労働とは違つた一種特別の労働である、さうしてトルストイなどが考へたやうに、それはあらゆる人にとつて必要な労働であつて、或程度までこの労働と接觸することを怠るとき、恐らくその人の生活全體に或種類の報いを齎さずにはゐないやうな、性質のものである、土を對手にする筋肉労働には、これを無視する者の觸れ得ないやうな、健全な喜びと苦みがあるであらう。單にこの一點から考へても、土地と農業とを忘れた文化が本質的に人間を幸福にする力があるかどうかは疑はしい——私はかういふやうな身の程を忘れたことを考へながら、芝草の間にまじる雑草をぬき捨て、行く。

芝草の間にまじつて最も勢力を逞しくしてゐるのは、葉が芝に似てもつとたけ高く延び、根の方に少し赤味を帯びた何とかいふ草である。私は一種の憎みを以て遠慮なしにこの似せ者を抜き捨て、しまふ。異臭を持つてゐるどくためも亦私の愛惜を受けることが出来ない。併し鐵火箸のやうに、諷ひ氣のない莖に、折から淡褐色の花ともいへやうな花をつけてゐるかやつり草になると、私の手は前ほど勇敢にこれをむしり取ることが出来ない。さうして愛惜のこゝろを持つて芝の間にまじる雑草を眺めはじめると、其處には何といふ多様な可哀らしい植物の種類が、この狭い空間にその生を營んでゐることであらう。丸い葉の柔かなものや、葵の葉のやうな形をして三四葉集つて一つの圓居をしてゐるものや、赤味を帯びた小さい莖を横に這はせながら、芝草のすき間に謙遜な自分の

領分を占めてゐるものや、見るに従つて新しい種類が目について來る間に、淡紫や黄色の小さい小さい花さへ咲いてゐるではないか。私は此等の小さい可哀いものを抜き捨てるに忍びなくなつて、彼の憎むべき贖者だけをあさつてこれを退治して行く。

併しこの贖者を根絶することだけでも容易ではない。大抵とり盡したつたもりで一兩日たつと、いつの間にか彼等は又芝より高くそのたけを挺でて、その存在を其處にも此處にも皆知してゐる。眞晝の光がギラ／＼と照つてゐるうちは、凡ての葉が一様にその光を照りかへしてゐるので、それがそんなにも眼立たないが、朝の柔かな光が草葉に置く露を目立せてくれるときには、露を宿して白がね色を帯びたその葉は、とても自分をかくすことが出来ない。かくて又私にはその朝の仕事が與へられるのである。

高等小學讀本の眞使命 卷三 男女用 終

昭和二年六月廿五日 印刷

昭和二年六月卅日 發行

高等小學讀本の眞使命卷三(奥付)

定價 金三圓五拾錢

著者 友納友次郎

發行者 藤原惣太郎
東京市京橋區入舟町五丁目一番地

印刷者 研文社
東京市芝區今入町拾番地



發行所 明治圖書株式會社
東京市京橋區入舟町五番

賣捌所 東京林六合館 大須柳原書店 名古屋川瀬書店
久留米菊竹金文堂 佐賀大坪淳信堂

(製本部……關根・中條・製本)



明治圖書會社藏版

終

明倫書局出版